

THE JAPANESE JOURNAL OF
HISTORY OF PHARMACY

薬史学雑誌

Vol.16, No.1.

1981

—目 次—

原 報

佐渡に自生するホソバオケラ *Atractylodes lancea* について……………安江政………… 1

史 料

明治時代の薬物展覧会について……………小山鷹二………… 9

史 伝

「生薬学」と訳した大井玄洞について……………浅野正義…………21

総 説

中国におけるジャコウジカの人工飼育……………伊藤和洋…………25

雑 録

新刊紹介……………35

前号の訂正…………… 8

学会記事……………36

会務報告……………37

THE JAPANESE SOCIETY OF HISTORY OF PHARMACY

Nihon University, Pharmaceutical Institute,
Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

薬史学誌

J. His. Pharm.

日 本 薬 史 学 会

THE JAPANESE JOURNAL OF HISTORY
OF PHARMACY, Vol. 16, No. 1 (1981)

CONTENTS

Originals

- Masaiti YASUE:** Concerning with Wild *Atractylodes lancea* DC. found in Sado Island of Niigata. 1

Historical Records

- Takaji KOYAMA:** Review of the Pharmaceutical Exhibitions in the Meiji Era. 9

Biographical Data

- Masayoshi ASANO:** On Gendô Ooi, who first translated Pharmacognosy into Japanese Expression "Shôyaku-gaku".21

General Remarks

- Kazuhiro Iro:** On Breeding of Musk Deer in China.25

Miscellaneous

- Book Review35
Errata 8
News of the Society36

入会申込み方法

下記あてに葉書または電話で入会申込用紙を請求し、それに記入し、年会費をそえて、再び下記あてに郵送して下さい。

〒101 東京都 千代田区 神田駿河台 1-8

日本大学 理工学部 薬学科 生薬学教室

滝戸 道夫

電話: 03-293-3201 (代)

佐渡に自生するホソバオケラ *Atractylodes lancea* DC. について

安江政一*

Concerning with Wild *Atractylodes lancea* DC. found in Sado Island of Niigata

Masaiti YASUE*

ホソバオケラ *Atractylodes lancea* DC. (Fig. 1b) は中国原産のキク科 (Compositae) の植物で、その根茎を乾燥したものは、漢方において蒼朮と称して薬用に供されている。朮は水毒を去る要薬とされ、水分代謝を盛んにして、胃内停水、利尿不全などを主治し、健胃整腸、利尿、発汗の効があるとして、現在も大衆薬の漢方製剤に配合されている。朮には蒼朮¹⁾、白朮^{1a)}の別があるが、基源植物は近縁で、白朮は根茎のコルク層を除去して製したものである。両者とも有効成分の精油含量には大差はない。

本植物の天然に分布する地方は中国大陸の中央部、江蘇、浙江、安徽、江西、湖北、湖南の各省と河南省の南部であって (Fig. 3)、佐渡とははなはだ遠隔の地である。近縁の変種にシナオケラ *Atractylodes lancea* DC. var. *chinensis* KITAMURA とナンマンオケラ *Atractylodes lancea* DC. var. *simplicifolia* KITAMURA の2種があり、前者は内モンゴから河北、山西、陝西、甘肅の各省および河南省の北部、後者は山東半島、吉林、遼寧両省から朝鮮半島北部にかけて分布し、ホソバオケラの自生地から北方、北東へと広が

ってわが国の方へ接近している。

生薬市場における蒼朮は、ホソバオケラのほか、その変種から調製されたものおよびそれらの自然交配によって生じた中間種らしいものも含まれている¹⁾。中国産蒼朮のうちホソバオケラを基源とするものは、保存するとき切断面に白色結晶が白衣状に析出する。このような現象は、変種から製したものには見られない。古方薬品考²⁾によると「……控貯則生白衣者為上品……邦産亦有数品称佐渡蒼朮者形如舶来而体重多膏控貯則生白衣……」とあるから、佐渡から蒼朮が生産、出荷されており、それは上等の品と評価されていたことがわかる。この白衣は *atractylol* と命名された物質で、 β -*eudesmol* と *hinesol* の分子化合物であることが証明されている³⁾。これらの物質には特効的薬理作用があるわけではなく、精油含量も三者に大差はないから、品質上等とされたのは、この白衣が贗物でないことの証拠になったためであろう。

上記のように、品質良好とされる中国産蒼朮の基源植物が、わが国の佐渡に野生状態になっていることが知られると、多くの生薬学者、薬用植物園管理者から注目され、佐渡に

* 新潟薬科大学 *Niigata College of Pharmacy*. Location: Kamishin'ei-cho 5829, Niigata.

- 1) 日本公定書協会: 第9改正日本薬局方解説書 DEF, D-524; a) D-727, 広川書店(1976); 難波恒雄: 和漢薬図譜(上), 48, 保育社(1980).
- 2) 内藤蕉園著, 難波恒雄解説詳解: 古方薬品考(本文), 72, 古方薬品考刊行会(1968).
- 3) 吉岡一郎, 高橋眞太郎, ヒキノヒロシ, 佐々木靖子: *Chem. Pharm. Bull.* 7, 319(1959).



a: *Atractylodes japonica*
KOIDZUMI オケラ

b: *Atractylodes lancea* DC.
ホソバオケラ

Fig. 1

渡来して種苗を採集して持帰った。現在では乱獲によって野生状態のものはほとんどみられず、切花用に民家の庭に栽培されているものが、わずかに残っているほかは、植物園に保護されて細々と命脈を保っている。このように特殊な薬用植物が、長期にわたって狭い一地方に分布しているのは輸入、栽培されたものの生残りと考え、その由来と消長を現地において調査した。

太平洋戦争後の混乱していた頃、各地で殖産興業が奨励された。佐渡羽茂町においてはホソバオケラを薬用資源として注目し、その増殖を計画した。この事業に直接参加し、推進役を果たした和泉蔵氏から⁴⁾本植物の伝来、増殖、絶滅に瀕するに至る経緯について聞くことができた。なお佐渡においては、ホソバオケラを薬用にすることはなく、火鉢の上でくゆらせて、家畜の蚊を防ぐのに用いるとか、生花にする程度で、重要な用途はなかった。

1951年(昭和26年)の末、新潟県では木村雄四郎博士を嘱託として、県下の野生薬用植物の調査を開始した。その活動の一環として佐渡をおとづれたとき、同博士は羽茂村(当時)の山野に中国産ホソバオケラが野生状に繁茂しているのを発見した。資料を東京に持帰っ

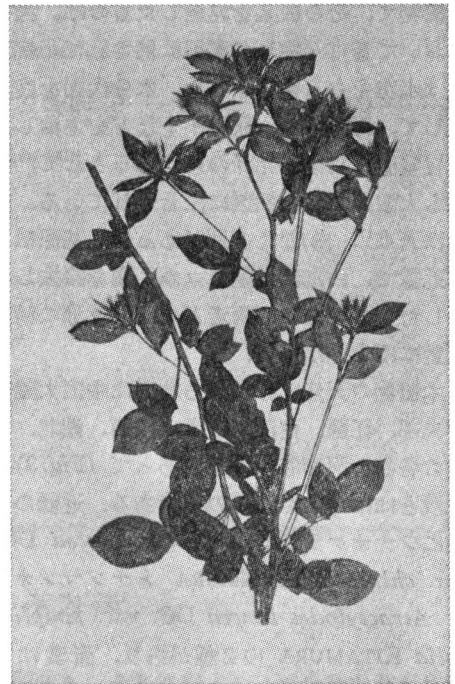


Fig. 2. *Atractylodes japonica* KOIDZUMI オケラ
佐渡金北山南麓、金井町中興の民家に栽培

て分析、調査した結果、優秀な薬用資源であることがわかった。そこで羽茂森林組合では、これを林産資源として開発する計画を立て、出荷先もきめた上、助成金を出して増殖を奨

4) 和泉蔵 (Osamu IZUMI): 新潟県佐渡郡羽茂町大字滝平1453

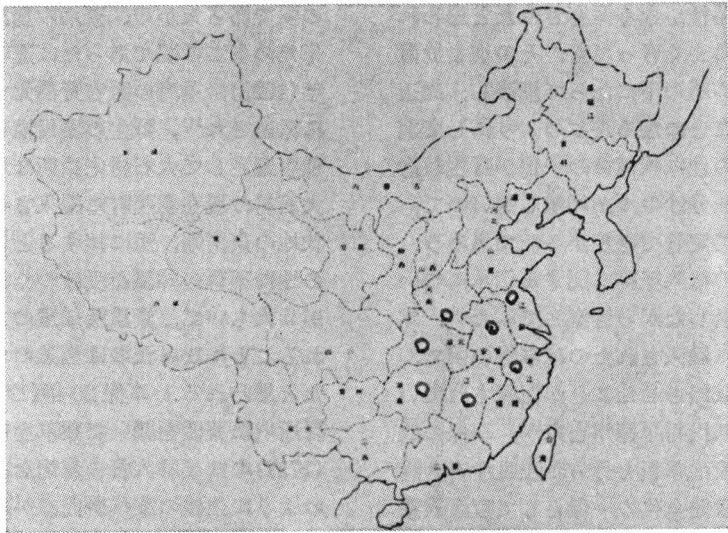


Fig. 3. 中国大陸のホソバオケラ分布地 (○印)

励した。和泉氏らは野生化したものの根茎を掘って集め、株分けして各所に植えた。戦後の荒廃していた頃であったから、藪を刈り、少し乾いたところで火を放って焼き、灰をひろげて麦やソバを播いた。このとき既に植えた株は地下に残り、また新たに根茎を植えてひろげた。本土から薬用植物関係者たちが島をおとづれたのもこの頃である。

1960年(昭和35年)頃、10年近く増殖につとめた根茎を採集し、蒼朮として出荷することになった。本植物を基源とする生薬は、その切断面に *atractylol* を白衣として析出することは前にのべたが、これは品質上の特徴であったのに、時の生薬取扱者はこれをカビと誤認して廃棄し、代金さえ支払わなかった。かくて蒼朮の出荷は1回だけで挫折してしまった。

さてホソバオケラの伝来について、木村は次のようにのべている⁵⁾。「享保年間以後羽茂本郷において地頭本間式部大夫の居城羽茂城趾に中国産ホソバオケラを栽培し、次第に近隣各村に普及し、ひところは佐渡蒼朮として

遠く江戸や浪花の漢薬市場に名をなしたことは内藤尚賢著、古方薬品考(文政2年)(1829)および浅田宗伯著、古方薬議(文久3年)(1863)によっても明らかであるが、明治維新により漢方の衰微とともに今やほとんど根絶するに至った」。一方、和泉氏の談話によると次のようになる。「享保の頃、五所城主本間式部大夫が薬用としてホソバオケラを輸入し、領内に栽培させたのが始まりである」。地味が適したとみえ、よく生育してそのまま野生状態となり、1935年(昭和10年)頃にはかなり多く繁茂していた。これを木村博士が発見して全国的に知られるようになった⁶⁾。

和泉蔵氏の研究⁷⁾によると、純系のホソバオケラは種子を生ずることが極めて少ない。それ故、江戸時代から今日まで永く野生状態になっていながら、分布はあまり広がらないままになっていた。しかし他種との交配は容易で中間種はでき易い。佐渡では近縁のオケラ *Atractylodes japonica* KOIDZUMI (Fig. 2) は、かなり遠方の金北山にわづかにみられるのみであるから、交配による中間種の生成

5) 木村雄四郎：新潟県の薬用植物，17. 新潟県(非売品)(1974)。

6) 羽茂川流域のほか、真野町西三川付近までひろがっていた。栽培はこのあたりまで及んでいたと思われる。

7) 和泉蔵氏の研究は目下実験中で最終的結論はまだ出されておらず、追って報告される予定であるが、氏の御好意により一部を借用することができた。

もなく、純系品種が永く保存されたと思われる。また焼畑によく育っても、そのまま放置すると丈の高い草の下になって消滅し、周辺部にだけ残ることになる。このようにして羽茂川の流域その他に栽植株の一部が野生状態に残ったが、株分けのほか増殖し難いので、帰化植物として定着できなかったであろう。

次に本植物の輸入経緯に関する伝承について、記録と照合しながら考察してみたい。本植物がわが国に輸入されたのは享保の頃で、それを各所に栽培させたことが記録されている¹⁾。享保は八代将軍徳川吉宗が、享保の改革とよばれる政治革新を行った注目すべき時代である。財政健全化の一環として殖産興業を奨励し、サツマイモの普及⁸⁾、タバコ栽培の自由化⁹⁾、野生薬用植物の精力的な調査開発およびその栽培の推進¹⁰⁾などがあった。人參の種子と苗が清国からもたらされたのもこ

の頃であったから、蒼朮の基源植物の入って来たのもこの頃であったに違いない。享保7年(1722)、幕府の医官野呂元丈ら4人が佐渡に派遣され¹¹⁾、野生の薬用植物を調査し、24種を選定して大石村庄兵衛ほか4名に教えた。大石村は現在羽茂町に編入され、羽茂平野扇状地の東南端、海に接するところである。この地に薬草の知識を受けつぐ能力を有する者が5人もいて、貴重な舶来の薬草苗が栽培されることになったのは当然のなりゆきであったと思われる。享保20年(1735)には佐渡奉行所内に薬園を開いて薬草を植え、元文2年(1737)には朝鮮人參の栽培を開始した¹²⁾。このように佐渡の薬草研究はかなり進歩しており、江戸小石川の御薬園との関係も深かったから、大陸からソノバオケラの苗がもたらされると、直ちに佐渡にも分与されたと思われる。その後、寛政4年(1792)、江戸表へ提出

8) 日本学士院：明治前日本生物学史(2)、80、臨川書店(1980)、青木昆陽は享保7年(1722)、小石川御薬園に甘藷を試作した。

9) 宇賀田為吉：たばこの歴史、118、岩波書店(1973)。

10) 日本科学史刊行会：明治前日本科学史総説・年表、325-333、日本学術振興会(1968)。

11) 佐渡郡教育会：佐渡年代記、上巻、253、臨川書店(1974)；永井次芳著、萩野由之校閲：佐渡風土記、巻之下、294、臨川書店(1974)。両書とも丹羽正伯の弟子4人、野呂元丈、本賀徳運、夏井松意、永井丈庵が派遣されたとしている。松意は松玄の誤記と思われる。元丈は正伯より年長であり、両者は師弟関係ではなく並列さるべきものであるが、正伯は薬園を管理していたので、採集した苗や標本は薬園の正伯宛に送られたことから、記録者が元丈を正伯の補助者とみたのであろう。

野呂元丈：1693-1761。稲生若水について本草学を学び、幕府の医官となり、正伯と共に諸国を採薬した。長崎からオランダ人が江戸に入ると、通詞を通してオランダ語の書物について質問し、「和蘭陀本草和解」を著し(1744)、後オランダ語の研究を吉宗から命ぜられた。

丹羽正伯：1700-1752。初め医を学び、後稲生若水について本草学を学び、享保5年幕府の医官となって諸国を採薬した。享保6年幕府は下総国滝台野に30万坪の薬園を設け、正伯と桐山大右衛門の二人に15万坪づつ薬草を栽培させた。晩年は師若水のあとをうけ、加賀藩の「庶物類纂」を補って完結した。

12) 上田三平、三浦三郎：日本薬園史の研究、219、渡辺書店(1972)。佐渡奉行所内に薬園を開設したのは享保20年(1735)であるが、同じ年に人參栽培成功の表彰があった(佐渡年代記、上巻248、294ページ)。人參草掛目付役 山田吉兵衛、同小使役 佐野惣兵衛の2人は、享保13年から人參の栽培を手がけ、常々精を出し、風雨の時は夜中も怠らず見廻って育成につとめ、年々多くの種子が得られるようになったとして、享保20年、山田5両、佐野3両の褒美を授けられた。彼等がこの年得た成果は次のようであった。享保13年植えたもの13本から種子365粒、同14年植えたもの23本中の12本から38粒、同15年植えたもの23本中の16本から127粒、合計530粒の種子を得た。これを全部播種した旨報告している。日本薬園史の研究において、奉行所内に薬園を開設したという年に、人參栽培の功労者が、年々多くの種子が得られるようになったとして表彰されている。そして更に2年おくれて人參栽培を始めたことになっている。これは奉行所内ではなく、島の中央部に広がる国中平野にある石台村で栽培が行われていたためである。日本人參史によると(47ページ)、人參輸入の経緯は次のようになっている。享保6年から毎年人參の生根を入れ、同12年には種子と生根を取りよせて試作したが活着せず、享保13年対馬から生根と種子を納入させ、これを日光で試作して始めて成功した。この苗が成長して、享保18年に最初の種子が得られた。これがいわゆるオタネニンジンの祖となったのである。このように佐渡における人參栽培者の表彰は日光における最初の採種より2年後れているが、佐渡における最初の採種は日光におくれたとは考えられない。2人の人參掛が表彰されたのには、それだけの価値があった。

した佐州産物志の中に、薬種として24種の生薬名¹³⁾があげてある。これが前に元丈らが教えた24種か否か不明であるが、この中に、わが国に産しないものも含まれているから、元丈らの選定そのままのものであろう。薬用植物の研究開発は、享保以後あまり大きな進歩はなかったようである。

人参栽培の成功の後、生薬の生産が続いたかどうか現地には記録が見当たらない。ただホソバオケラだけは佐渡蒼朮として成書に名を留め²⁾、生薬学の教科書¹⁴⁾にも「……ホソバオケラから得る生薬は従来佐渡より産出の栽培品に基き、佐渡蒼朮と称した」とある。このように書物に佐渡蒼朮の名があって、現地に生産の記録がないのは佐渡の土地柄から、産出する莫大な金、銀の蔭にかくれて、少額の生薬は無視されたか、または生薬の取引は民間の事業として公的記録からもれたのであろう。なお蒼朮、白朮ともに、中国産たと和産たとを問わず野生の基源植物から製し

たものであるが、佐渡産のみ栽培品であったことは注目されてよいであろう。

次に伝承の人物、本間式部大夫について考える。本間氏と佐渡のかかわりについては、新潟県大百科事典に要領よくまとめられている¹⁵⁾。村上天皇(946-967)の皇子、為平親王5世の孫、源有兼が相模守となり、海老名郷に居館して海老名氏を名乗った。その子孫が承久の変の結果、順徳院の供奉として佐渡に渡って定着した。本間氏は佐渡支配のため、一族庶子家を代官として島内各郷に配置した。石田郷、波田郷、羽茂郷、久知郷、木野浦郷、大浦郷などである。これら庶子家は鎌倉幕府の滅亡と、それに続く南北朝の争乱期の中で、惣領家に対抗して代官地に独立し、足利幕府の安堵状を得た。羽茂本間氏、河原田本間氏、久知本間氏など呼ぶのは、こうして成立した郷地頭たちであった。

では本間式部大夫はどういう人物であったろうか。羽茂村誌所載の「羽茂城址五所神社

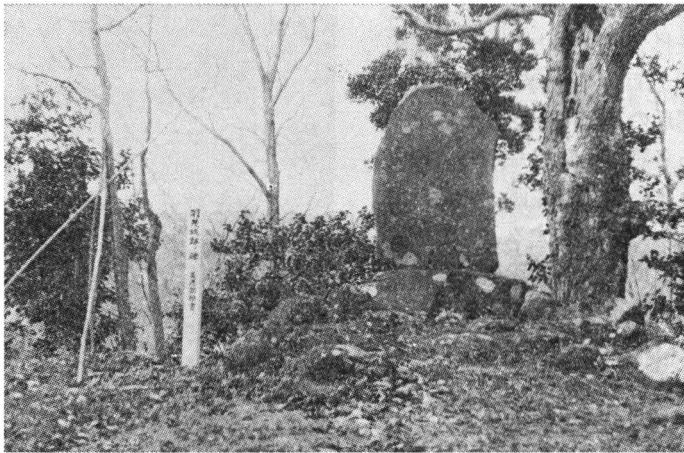


Fig. 4. 五所(羽茂)城址、遺蹟の碑

13) 佐渡郡教育会：佐渡年代記，中巻，110，臨川書店(1974)。ここにある薬種24は次の通りである。

1 海桐皮，2 淫羊藿，3 辛夷，4 黄连，5 北五味子，6 旋覆花，7 遠志，8 前胡，9 羌活，10 菟糸子，11 萎蕤，12 沙参，13 防风，14 杜仲，15 威灵仙，16 沢瀉，17 藜蘆，18 当归，19 鬼臼，20 升麻，21 草烏頭，22 細辛，23 葶藶，24 黒三稜。(番号筆者)

佐渡年代記の記録中、享保7年の項には24種とあるだけで生薬名も植物名も不明である。享保8年には「……大石村庄兵衛外4人教置し薬草商売望のもの義に付掛合有之」とあって、ただの教え放しではなく、実用化あるいは換金の方向に動いていたと思われる。庄兵衛らはかなりの知識人であったはずであり、蒼朮起源植物は現に羽茂に野生状に繁茂しているのだから、朝鮮人参をも含めて佐渡における薬草栽培の中心は羽茂にあったと推定できそうである。

14) 藤田路一：生薬学，171，南山堂(1957)。

15) 新潟県大百科事典，563，日潟日報事業社(1977)。



Fig. 5. 五所(羽茂)城址

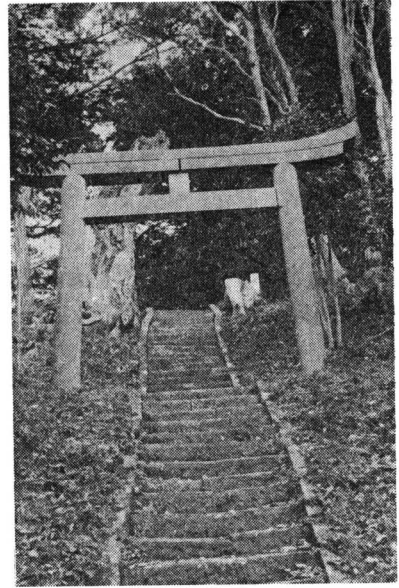


Fig. 6. 旧五所神社鳥居

遺蹟之碑」(Fig. 4)の碑文に手がかりとなる記録がある¹⁶⁾。「……案地誌在往古地頭分領之時元弘中式部大夫本間重成別自雑太城世邑干此領二千五百二十石称曰地頭相伝至对馬守高貞天正17年拒上杉景勝之軍力戰不利城率陷本間氏領此土亡慮二百十有余年矣……」。この村誌には、本間氏の系図も記されているが、各種の資料による各説があって一定の結論にはなっていない。また系図は佐渡古実略記にも出ている¹⁷⁾。これらを総合すると、順徳院の供奉として佐渡に渡った本間氏の初代から、あまり離れていない子孫に式部大夫重成^{サワダ}があって、元弘年間(1331-1333)、雑太城から赴任して羽茂本間氏の祖となった。その後、何代かを経て高貞、高頼の兄弟となった。兄高貞は対馬守と称して羽茂に、弟高頼は三河守と称して赤泊にいた。天正17年(1589)、上杉景勝の侵攻にあって落城し、本間氏の佐渡支配はここに終わった。この本間氏の旧徳を偲んで住民が居城、羽茂城の跡に五所神社を創建した¹⁸⁾。Fig. 6の石段の上がならされて、ここに城があり、後神社がおかれた。その名残

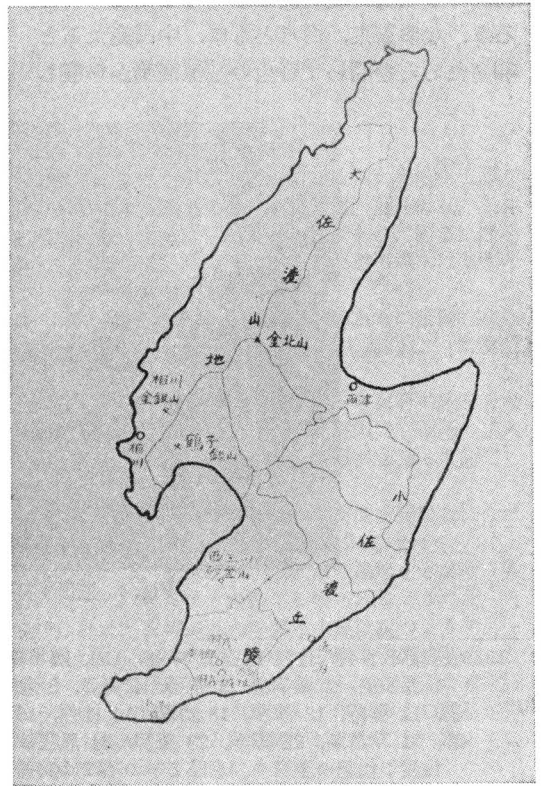


Fig. 7. 佐渡全図

16) 羽茂村誌編集委員会：羽茂村誌，205，新潟プロセス印刷株式会社(1956)。

17) 岩間徳太郎：佐渡郷土史料，第二集，佐渡古実略記31-124，佐渡群書文庫(1979)。

18) この神社は前記碑文によると，明治40年(1907)，菅原神社に強制的に合併された。

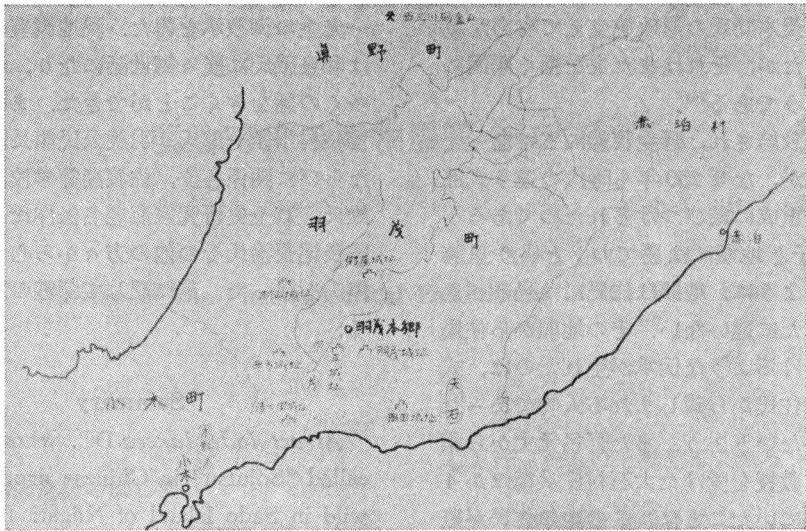


Fig. 8. 佐渡羽茂町と付近

の石の鳥居が残っているが、社殿はない。このように五所神社と羽茂城は同一の場所となるのである。五所神社、五社神社と呼ばれるのは、祭神が五柱であったり、5か所にあった神社を一括したりした場合の呼称である。五所城は五所神社のあった場所に、それ以前にあった城ということになり、五所城と羽茂城は同一物の別名である。五所と五社の音の類似から五所をゴシャとよみ、ここの初代本間式部大夫の名とホソバオケラが結びつけられたものと思われる。羽茂本間氏の初期の居城は、小木に近い清土岡にあったが、越後との間が険悪になってから羽茂本郷に移ったといわれる。

現在、佐渡の玄関は両津港になっているが、江戸時代までは本土にもっとも近い小木港が上陸地点であった (Fig. 8)。この地は小佐渡の突端に近く、南面して北風を受けず、冬の厳しい寒さから守られた土地である。佐渡は平安時代から西三川砂金山が開発されており、天文11年(1552)には鶴子銀山ツルコが開発され、貴金属の関係で知られていたが、本間氏初代の頃はまだ相川金山は発見されていなかった。江戸時代に入ってから、幕府は金山を直接経

営し、重要な財源としていたので、有力な奉行所が置かれ、これが武家文化の中心となった。一方佐渡には順徳院、日蓮ら著名な文化人、政治家が流され、また日本海の海上交通の要衝として京、浪花と直接結びついていた。こうして佐渡は辺境の孤島でありながら本土より高い文化を誇っていた。奉行所内の薬園という、例の少い施設もこの地が都会的様相を呈していたためであろう。奉行所の所在地相川より羽茂の方が南向で暖かく、土地が平坦で、小木港から相川への途中の地味のよいこの地に薬草が植えられたのもうなづけることである。城址といっても、天守閣がそびえ、濠をめぐるすというような城ではなく、羽茂城は室町時代、戦国期中葉の城郭の典型的のものといわれ、本城、二ノ城、北ノ城、馬場、荒神城、五社城、南城、殿屋敷、奥方屋敷、家老屋敷、大門、東門などの諸遺構や地名などが残っている¹⁹⁾。このほか羽茂平野を囲む岡の上には、いくつかの防備のための城址が知られている。そのうちの最大のものは清土岡城址で、羽茂本間氏初期の居城であったという。そのほか、羽茂平野への入口に当たる場所にも城址がみられる (Fig. 8)。西三川

19) 羽茂村誌 (前出) 206; 新潟県教育委員会: 新潟県の文化財, 第三版, 272, 新潟県文化財保護連盟 (1971).

砂金山は羽茂本間氏の財政を支えて有力な城を構えさせたが、それはまた災を招く原因にもなったようである²⁰⁾。

羽茂郷に栽培され、野生状態にまでなった薬草の輸入が、なぜ250年も時代の違う式部大夫、本間重成に結びつけられたのであろうか。「泣く子と地頭には勝てぬ」という里諺からわかるように、地頭は住民には恐るべき存在であったに違いない。その地頭から住民が恩恵を受けるような伝承が生れたのは、式部大夫が、住民から親しまれる人物であった証拠に違いないと思う。また野呂元丈から薬草について教授を受けた大石村庄兵衛ほか4名が羽茂郷にいたことは、この地の住民が豊かで、ゆとりある生活をして知識人を育て得る状態であったことを示している。そしてこの地にホソバオケラという外来の換金作物の栽培が定着していた事実はそれを支持している。この事業は一方では吉宗の殖産興業政策の一端を表わす生きた史蹟といえるであろう。

本研究において、新潟薬科大学教授中村辛

一先生の御教示を得た。現地調査に当たっては和泉蔵氏に度々御世話になり、示唆に富む多くの話をきくことができた。また羽茂町教育長村川徑一郎氏、羽茂公民館長藤井三好氏、ならびに関係各位、佐渡高等学校教授児玉信雄氏、郷土史研究家海老名保作氏、植物研究家長尾長治氏その他の方々から心からなる御協力を賜った。茲に記して深甚の謝意を表する。

Summary

Atractylodes lancea DC. whose roots are called "Sojutsu" in Chinese drugs is found wild in Sado Island of Niigata Prefecture. The origin of this plant is the central part of China along Yantze River and it has been thought that it was not distributed in Japan. Thus this plant must be imported and cultivated some time ago. In this article the author would like to discuss when it was imported and who had it imported.

本誌第15巻1号の訂正

「丹羽藤吉郎博士への弾劾書」を読む (p. 11~14) において
13頁右、上から4行目を次のように訂正して下さい。

〔誤〕

〔正〕

高橋隆造 → 和智英雄

20) 山本修巳: かくれた佐渡の史跡, 第5版, 235, 新潟日報事業社(1978); 佐渡年代記, 上巻, 2: 天正17年6月, 秀吉は上杉景勝に対して次のような意味の下知をしている, 「佐渡では庄園地頭が御家人と称して居城を構えているが, 一国一城とすべきこと, 西三川の砂金は伏見大阪へ納めるべきこと」。

明治時代の薬物展覧会について

小山 鷹 二*

Review of the Pharmaceutical Exhibitions in the Meiji Era.

Takaji KOYAMA*

1. 薬物展覧会のはじまり

薬物展覧会と言えば、現在の日本薬学会年会の際の薬科機器・新薬試薬・薬学関係図書展示会を総合したもの程度に考えていたが、現在と状況の全く異なる明治20年(1887年)代においては薬物展覧会は、薬学・薬業関係者にとって最高最大の行事であった。調査を進めるにつれ薬物展覧会がいかに重要であったかを知り、驚かざるを得なかった。これ程重要な事業であったのであるから、この際一応纏めて置く事も意義あるものと思える。

薬物展覧会の名称は用いなかったが、その始まりは明治18年(1885年)10月10日である。この日、大日本私立衛生会事務所で東京薬学会¹⁾例会が開かれた。席上長井長義会頭は「牡丹皮・わさび試験成績」を発表し、同時に近くドイツ国へ6ヶ月の予定で渡航するので、前年帰朝以来帝国大学・衛生局試験所・衛生局薬品試験所の三ヶ所で同氏指導のもとに得た製品を展示した。展示品²⁾は主として漢薬から得られた製品で、牡丹皮のフェノール性成分、わさび・日本芥子の刺激性成分、麻黄・黄連のアルカロイド、蒼朮・川芎・当帰・芍薬根・茶実・黄芩より得た化学的物質、醬油から得た含窒素結晶性成分であったが、参加した会員(34名)に多大の感銘を与えた。この成果を受けて第一回薬物展覧会へと発展

して行ったものと考えてよからう。

2. 薬物展覧会の目的

明治26年(1893)10月アメリカ合衆国シカゴで万国薬学会が開催された。日本薬学会としては、7月8日の例会後評議会を開き、人員の参加は取止めるが、薬学雑誌の既発行分を贈ること、ならびに創設以来の日本薬学会の来歴および会員の研究報告を英文に翻訳して送ることを決定し、丹羽藤吉郎・田原良純・堀鉞之丞の三氏を整理委員に選んだ。その結果として薬学雑誌1号から136号までを8月19日に、翻訳文300部を8月23日に発送した。この薬学会来歴の中に「薬物展覧会を開くこと2回。第1回は明治23年(1890)1月、第2回は明治26年(1893)4月にして、その目的とする処は、薬学上の攻究及び応用の成果たる実物を陳排羅列して、親しく斯学の進歩を目撃して以て将来拡張の地歩を築くにあり」³⁾として、薬物展覧会の目的が、薬学の進歩発展の基礎となることを述べている。

更に、第3回薬物展覧会趣旨⁴⁾によれば、「凡そ學術の奨励推挽は、新誌時報と集会討論との介助を籍るを常とし、日本薬学会亦夙に両者の説ありと雖ども、我薬学攻究及び応用の成果たる実物を一堂の中に排列し、新誌集会の外親しく斯学の進歩を目徴し、将来拡張の地歩を造るは、我同志者の最も緊切の責

* 岡山県立短期大学 Okayama Prefectural Junior College
700 岡山市伊島町3-1-1
Location: Ishima-cho 3-1-1, Okayama City

務なるに非らずや」として学術誌への研究発表、学会での討論以外に、薬学の進歩発達をはかるには実物を実際に見る展覧会が重要であることを強調している。

又、第1回九州薬物展覧会開設趣旨⁵⁾によれば、「凡そ学術の進歩知識の発達は、必ずや其攻究と実験とに依らざる可からず。若し此の一を欠かば、諸科の学術豈能く今日の隆盛に至らんや。況んや将来の大成に於ておや。(中略)薬学攻究の材料及応用の結果たる実物を一堂に陳排し、一は同志諸君と共に品質の優劣精粗を鑑別して薬学の攻究に資し、一は以て業務の一斑を公衆に示し、倍々進んで斯学の普及を計らば、其裨益する所蓋し少しとせざるべし」とあって、更にその目的を具体的に示して薬学薬業関係者に対しては、薬物の新知識を実見して医薬品の優劣精粗を鑑別してその研究を助け、公衆に対しては薬学の必要性を認識させて薬学の普及をはかるものとしている。

このような目的で薬物展覧会が開かれたのであるが、以下歴年的に実状を見ることとする。

3. 第一回薬物展覧会⁶⁾

明治22年(1889)12月23日午後3時より京橋区木挽町大日本製薬会社で東京薬学会評議会が開かれ、明年1月開催予定の第10回総会の件について協議した。出席者は長井長義会頭、丹波敬三、福原有信の幹事、田原良純、丹羽藤吉郎の常議員、村井純之助委員の6名であり、長井会頭の発議で総会当日に学術展覧会を開くこととし、次の事項を決議した。

明治23年(1890)1月18日、麴町区富士見町富士見軒で第10回総会を開く。
総会の順序は、12時30分より庶務会計報告、13時より議事、14時30分より役員選挙、15時30分より薬物展覧会、16時30分より学術講演、18時より懇親会とする。
薬物展覧会への出品は、和漢洋薬品・薬学および衛生化学に関する器械・図書とす。出品書は1月10日迄に東京衛生試験所に送

附し、現品は1月15日迄に到着し、運搬費は自弁とする。

明治23年(1890)1月18日予定の如く富士見軒で東京薬学会第10回総会が開かれた。総会が長引いたので1月27日臨時総会を開いて残りの議事を審議し、役員選挙をすることとし、15時30分より薬物展覧会が開かれた。

展覧会を参観した主な来賓は、文部大臣榎本武揚、文部次官辻新次、学士会院長加藤弘之、専門学務局長浜尾新、海軍軍医総監高木兼寛、海軍軍医大監実吉安純、陸軍軍医正永松東海、衛生局次長福田重因、第一高等中学校教頭久原躬弦、理学博士伊藤圭介、大日本製薬会社長新田誠丸、長谷川泰の諸氏で、長井会頭は来賓を会場に案内して詳細に説明をした。この来賓を見ても薬物展覧会が如何に重要視せられたか明らかであろう。

ついで16時30分より講演があり、18時30分より同所食堂で懇親会を開いた。

尚、展覧会に出席した会員は78名であり、展覧会開催のため臨時に経費が必要であったので、会員18名からの寄附金97円、特志者4名の寄附金40円、計137円で賄った。

4. 第二回薬物展覧会⁷⁾

明治26年(1893)4月、第2回日本医学会が東京で開かれる事となった。日本薬学会としては、この協賛行事について同年2月4日、14日、23日の3回にわたって神田仲町福田家で評議会を開き、薬物展覧会開催を決定して、次の照会状を発送した。

拝啓 陳者来四月上旬第二回日本医学会開設に付、本会に於て特に薬物展覧会を設け、貴会々員御招待致度候間、此段御照会候也。

二月廿三日 日本薬学会
第二回日本医学会 御中

3月11日の評議会で、薬物展覧会の委員長・副委員長・幹事には日本薬学会会頭・副会頭・幹事を充てる事とし、委員30名を囑託し、更に臨時委員38名を依託した。3月29日、4月1日委員会を開き、各委員は4月2日か

ら4日まで会場である帝国大学小石川植物園に出向いて陳列品を整理し、4月5日より9日まで5日間薬物展覧会を開催した。

第1日は招待者80名、一般参観者1,018名、第2日午前は会員家族および新聞記者を招待し、正午から第2回日本医学会参加者約800名を招待した。長興専斎、三宅秀、大沢謙二、後藤新平、山根正次等医学会の指導的人物が幹旋の労を取った。第3日は招待者100名、一般参観者1,714名。この日が最終日であったが、地方会員の要望をいれて2日間延期する事となった。第4日は招待者56名、一般参観者904名。第5日は久邇宮殿下台臨せられ、招待者92名、一般参観者2,048名であった。

4月10日、11日の両日は各委員は植物園に参集して跡片附をし、4月23日11時30分から下目黒村日本麦酒会社で慰労会を催した。

4月15日附第二回日本医学会から次の挨拶状が来た。

肅啓 陳者今回本会開設に付、特別の御賛助を蒙り、且参観場に於て懇篤なる御説明を辱ふせし段、一同深く感謝致し候処に御座候。右不取敢御礼申延度、乍略儀寸楮捧呈仕候。草々敬具。

四月十五日 第二回日本医学会発起人一同 日本薬学会 御中

4月15日薬学教室で開催の日本薬学会例会および5月16日福田家で開催の評議会で薬物展覧会の残務について協議した。この展覧会の経費は大略以下の通りであった。

32円34銭	植物園代人料及集会費
42円85銭5厘	招待状及入場券印刷代
101円01銭3厘	会場裝飾物品代
82円91銭	運搬費其他傭人足手当人力車代
71円43銭	弁当及菓子代
4円13銭	諸紙代
27円42銭2厘	草履其他薪炭雜費
18円41銭	郵便電信費
16円09銭7厘	新聞広告代
9円50銭	委員撮影代

43円70銭 慰労会費
計 450円10銭7厘

その他日本麦酒会社より戎ビール 400 l、大日本製薬会社より蒸溜水ラムネ70ダース、19名の会員から日々の茶菓の寄贈があった。

5. 第三回薬物展覧会⁴⁾

第二回薬物展覧会が成功裡に終了した直後から、東京以外の地域でも開催の要望があり、まず名乗りをあげたのは関西および九州であった。九州は後述する事として関西の動きを述べる。

小磯吉人他12名の連署で日本薬学会に対し明治28年(1895)京都で薬物展覧会を開催する要望書が出され、明治26年(1893)7月8日医科大学薬学教室で開催された例会後の評議会で承認された。この時の出席者は長井長義会頭、下山順一郎副会頭、丹波敬三・山田董の幹事、丹羽藤吉郎・高橋秀松・古屋恒次郎・平野一貫・杉山仲蔵の常議員であった。

同年11月18日第3回薬物展覧会委員33名(東京10名、京都10名、大阪10名、兵庫・千葉・滋賀各1名)を委嘱した。

明治27年(1894)1月20日薬学教室で開いた第14回日本薬学会総会で展覧会委員の一部を交替を認め、2月8日福田家で評議会および展覧会委員会を開き、展覧会の方針および経費について協議し、2月22日附をもって全国にわたる展覧会委員63名(東京9、大阪6、神奈川・茨城・静岡・愛知・山梨・宮城・山形・秋田・新潟・富山・石川・岡山・広島・福岡・長崎・熊本各2、埼玉・千葉・栃木・群馬・青森・福井・兵庫・和歌山・島根・山口・香川・愛媛・高知・大分・佐賀各1)を追加囑託した。

2月26日、3月23日、3月28日の三回にわたる福田家で開催の評議会で第3回薬物展覧会について協議し、4月19日から29日迄丹波敬三幹事を京阪地方へ派遣し現地でも協議した。5月8日福田家で開いた評議会で第3回薬物展覧会の趣旨ならびに出品手続を決定した。

「我日本薬学会は去る明治23年に於て薬物展覧会を東京九段上富士見軒に設け、第2回を同26年帝国大学小石川植物園に開き、共に少なからざる利益を享受せり。而して第2回の成績之を第1回に比れば、大に斯学進歩の実を示せしこと頗る吾人の欣喜する所なり。只憾む、以上兩處の展覧会は、共に之を東京に開設したるがため、日本薬学の利益を企図するに就て聊か偏頗の嫌なきにあらざること。我輩茲に感ずる所あり。後來開設の地を轉換し、尚ほ関東に或は関西に或は北海道に或は九州に逐次順環汎く本邦薬学の普及を計らんと決せり。依て茲に明治28年を期し第3回薬物展覧会を京都市に開設せんとす。抑も京都は桓武天皇奠都以来一千年の勝地にして本邦文華學術の産出地たるのみならず、全国商工貿易の一大中心たる阪神に接近し、現今に於ける薬業界の近況を視察するの便亦尠しとせず。且つ明年は内国勸業博覧会の開設亦此地に在りて内外人士の雲集期して待つべし。故に此好機を時として一層盛大の薬物展覧会を設け、汎く我同志者諸君の出品を促さんとす。冀くは左記の区分に属せざる物品と雖ども我薬学の範囲を超へざる以上は、成るべく多数に出陳展列し、以て我薬学の進歩を幫助せられよ」。この趣旨を見ると、内国勸業博覧会が京都で開かれる好機に京都で薬物展覧会を開催するのであるが、全国各地で逐次開催して薬学の普及をはかる意図であることがわかる。

出品手続によると、会期は明治28年(1895)4月5日から7月15日迄の間の7日間とし、出品目録は前年の12月末日迄に送付することとし、出品物の区分としては

- (1) 薬学に関する書籍
- (2) 天産物、植物・動物・金石の標本
- (3) 生薬
- (4) 化学的製品、新薬類
- (5) 医薬標本および繙帯用品
- (6) 衛生化学に関する器械及び参考品
- (7) 裁判化学に関する器械及び参考品
- (8) 薬学に関する諸器械

とあるが、「薬学に関するものは直接と間接

を問はず何種類にても出品することを得」である。同時に日本薬学会会員および有志者の寄付金募集を依頼している。

明治27年(1894)7月8日薬学教室での例会後評議会を開き丹羽藤吉郎委員を京都に派遣することを決める。明治28年(1895)となり、1月22日・2月13日・2月21日と相次いで福田家で評議会を開き第3回薬物展覧会の件で協議し、京都洛東南禅寺前の金地院を会場として5月9日から15日迄7日間開催し、3月1日から事務所を京都市烏丸通御池下る京都薬品試験所内に設け、出品目録提出を3月31日迄とし、長井会頭・丹波幹事を京都へ派遣することを決定した。

2月28日長井会頭・丹波幹事・鈴木書記は京都に出发し3月4日帰京。会頭一行を迎えて3月1日午後6時より京都薬品試験所で委員会を開き細部の打合せを行ったが、容易に決定せず翌2日午前4時30分までかかった。

ついで3月7日・3月18日福田家で評議会および展覧会委員会を開き、3月29日丹波幹事は京都へ出向し、4月2日京都事務所で委員会を開き、4月20日薬学教室での例会後評議会を開いて展覧会について協議し、5月1日より準備のため長井会頭・下山副会頭以下東京在住の委員23名が漸次京都へ出発し、5月5日から8日まで会場の陳列準備にあたる。即ち5日17名、6日22名、7日18名、8日30名が金地院の会場整備を行った。

又、会期中の担当委員を定め、毎日交替して各任務に従事する事とした。即ち招待者および一般参観者を迎接する迎接委員、陳列品について説明する説明委員、招待者を歓待する歓待委員、場内売品陳列場を監督する売店委員を定め、別に給養係3名、新聞社員歓待係2名を置き、現地事務所を真乗院の展覧会委員合宿所に設け鈴木正肥書記が此所に常駐した。各委員の員数は下表の通りであった。

	迎接委員	説明委員	歓待委員	売店委員
5月9日	13	43	19	3
10日	13	45	22	2
11日	11	47	21	3

12日	13	51	26	3
13日	14	50	21	4
14日	12	56	25	2
15日	10	50	30	3

5月9日午前8時開会、5月15日午後6時閉会したが、この間の参観者は次の通りであった。

	招待者	一般参観者	計
5月9日(木)	48	348	396
10日(金)	36	488	524
11日(土)	62	348	410
12日(日)	144	1,485	1,629
13日(月)	184	1,035	1,219
14日(火)	146	1,065	1,111
15日(水)	85	1,380	1,465
計	705	6,149	6,375

5月16・17の両日は会場の後片付にかかった。16日午後6時から京都河原町三条上る共楽館で慰労会を開いた。参加者は110名であった。

尚、この間5月11日午後6時から京都河原町私立京都薬学校で日本薬学会例会を開き学術講演4題の発表を行った。

第3回薬物展覧会の収支決算は次の通りであった。

収入の部	
2,396円52銭	寄附金(626名より)
30円59銭	雑収入
300円	日本薬学会補助金
計 2,727円11銭	
支出の部	
297円65銭	印刷費
144円22銭	郵便電信代
421円59銭4厘	運搬費
400円98銭7厘	旅費
228円82銭3厘	集会費
700円81銭	会場費
243円	合宿所費
290円02銭6厘	雑費
計 2,727円11銭	

この他に日本酒・葡萄酒・ラムネ・煉乳等多数の寄贈が有志によって為された。

6月13日・7月13日福田家で評議会を開き残務について協議し、これをもって第3回薬物展覧会の一切の行事を終了した。

6. 熊本薬物展覧会⁹⁾、千葉薬物展覧会¹⁰⁾

第2回薬物展覧会が帝国大学小石川植物園で成功裡に終了したのを見て、堀口広助は熊本で独自に薬物展覧会を開くべきであると提案し、議纏まり早速委員を決めて開催準備にかかった。同展覧会の役員は次の通りである。

委員長	中西司馬
副委員長	堀口広助
庶務委員	竹内辰蔵、園部交雑
会計委員	永田 斉、今田龜彦
蒐集委員	堀口広助、森本栄太郎、瀧崎光豊、渡辺宗太郎、高浜利平

中西委員長は第六師団軍医部附陸軍一等薬劑官であるが、私立熊本薬学校校長であり熊本県薬劑師会の会頭を兼ねていた。堀口副委員長・竹内委員は熊本衛成病院附陸軍薬劑官であったが、私立熊本薬学校の教員であり熊本県薬劑師会の評議員であった。園部委員は私立熊本薬学校の幹事であり、設立者の一人であった。森本委員は私立熊本薬学校の専任教員であり熊本県薬劑師会副会頭であり、瀧崎・渡辺両委員も薬学校教員であり薬劑師会評議員であった。従って熊本県薬劑師会の主催であっても私立熊本薬学校の主催とも考えられるもので、事務所は熊本市山崎町私立熊本薬学校に置かれた。

委員会を開くこと十数回、蒐集旅行に出掛けること6回、出品依頼状を出すこと十数回。東京から日本薬学会々頭長井長義、同幹事丹波敬三、同常議員平山増之助(前私立熊本薬学校校長)三氏の来熊を求めて、明治27年(1894)7月21・22の両日熊本市で薬物展覧会を開催する準備を着々と進めて来た。然し7月10日になり熊本薬学校で開かれた熊本県薬劑師会例会で、「時局不穩の折柄、止むを得ず無期延期」と決定した。

7月10日と言えば、日清両国が相互に朝鮮出兵を通告して約1箇月、確かに日清戦争前夜で時局不穏ではあった。陸軍薬剤官が主力をなしている展覧会委員であって見れば、何時出動下命があるかも知れない状態ではあった。然し日清戦後の宣戦布告は同年8月1日であり、日本薬学会はこの前後にも着々と京都の薬物展覧会の準備を進めている点から見て、時局の問題もさることながら、薬学会として熊本に協力する余力の無かった事が無期延期の大きな原因であったと考えられる。

然し独自の力で東京に次いでいきなり九州で薬物展覧会を開催しようと企画した熊本の薬学薬業関係者の進取の気象は高く評価すべきであろう。

薬物展覧会として記録に残っているものはこれ以外に千葉がある。千葉県千葉町の第一高等中学校医学部¹¹⁾では、明治27年(1894)3月18日薬学科第1回生の卒業証書授与式が行われた。これを記念して同学部で薬物展覧会が開かれ、日本薬学会からは丹波敬三幹事と鈴木正肥書記が千葉に出向している。又、明治29年(1896)3月8日同じく第一高等学校医学部¹¹⁾卒業式の際に薬物展覧会を開催し、日本薬学会から山田董幹事が派遣されている。この千葉における両度の薬物展覧会は小規模のもので、恐らく現在の学内解放程度のものであると思われるが、日本薬学会がわざわざ幹事を応援出張させている点から見て、薬物展覧会が当時いかに重要な行事であったかを知ることが出来る。

7. 九州薬物展覧会

「先に日本薬学会は斯学の普及を計らんが為め、薬物展覧会を開設する已に3回。之が為其進歩を実示し其利益を享受せし事一般社会の認識する所なりと雖も、其開設の地皆京都以東にあるを以て、帝国南辺に偏在する我九州の地に於ては、実に多少の遺憾なき克はざるなり。我同志者茲に見る所あり、去る明治27年を期して熊本薬物展覧会を開設せんとするや、恰も軍国多事の時期に遭遇し、遂に延期の止むを得ざるに処れり。然れども今や

平和克復し、加ふるに戦勝の余榮に依り、百事膨脹の機にあり。豈独り我薬学に於て拡張の法を講ぜざらんや。況んや天与の産物豊饒にして斯学上多望なる台湾の新に領土となるに於ておや。(中略)茲に於てか九州の同志者相謀り明治30年初夏の候を期し、第一回九州薬物展覧会を熊本に解設せんとす。幸にして日本薬学会会頭長井博士及其他先輩諸氏の已に來会を承諾せらるるあり。展覧講演二つながら之を一堂に集むるを得ん」。

これは明治30年(1897)3月1日に発送された第一回九州薬物展覧会趣旨¹²⁾の一部であるが、無期延期した明治27年(1894)の熊本薬物展覧会を戦後早速にも開催しようとする意気高らかなものである。然し熊本の薬学関係者には陸軍薬剤官が多かった為に、薬物展覧会委員も大幅に交替し次の役員¹³⁾となった。

委員長	三善清房
副委員長	中山甚三郎
庶務部長	倉知精三
庶務委員	園部交雅、森本栄太郎、広島平治郎、長谷川佐太郎、永田 斉
会計部長	中山甚三郎
会計委員	高浜利平、渡辺大太郎
蒐集部長	渡辺宗太郎
蒐集委員	今田亀彦、畠中正雄、甲斐譲治、吉井武三郎、高藤平吉、村上栄生、大森偉三、朽原豊喜、松田敬三郎、松島寿太郎、小林虎雄、江並民吉、遠藤勝熊、木原喜三郎、木下真三郎

尚、熊本県薬剤師会(会頭渡辺宗太郎、副会頭園部交雅)会員(総員62名)はすべて準備委員となり、役員は4日目毎に事務所である熊本薬学校に集会して準備に当った。又、各地の出品者の便宜を計るため全国的に71名(東京11、大阪7、京都・愛知・宮城・石川各4、神奈川・千葉・兵庫各3、静岡・新潟・秋田・福井・山口・愛媛・台北各2、青森・山形・富山・滋賀・和歌山・岡山・広島・島根・徳島・香川・高知・沖縄・台南各1)の蒐集委員を囑託し、更に九州各県には18名

(福岡10, 長崎4, 佐賀3, 鹿児島1)の整理委員を委嘱した。三善委員長は中西司馬の後任として来熊した陸軍一等薬剤官で熊本県薬剤師会審議員であり、副委員長中山甚三郎は熊本県病院薬局長、庶務部長倉地精三は熊本衛成病院附陸軍薬剤官で共に熊本県薬剤師会審議員である。

3月1日発表の第一回九州薬物展覧会規則¹²⁾によれば、「本会は薬物の新知識を交換し斯道の発達を計り、併せて其必要を公衆に知らしむるにあり」と、その目的を明らかにし、出品物は「自然産物部・生薬部・化学製品部・製剤部・器械部・図書部・衛生及裁判化学部・参考部・その他」に区分し、「出品希望者は5月末日までに品名等を通報し、現品の送付は本会よりの通知を待って発送する」事とし、「運搬費は会の負担」とした。又、「本会の経費は会員の献金および有志寄附金を以て支弁するものとす」として「会員となるには金1円」「金2円以上又はそれに相当する物品を寄贈した者は名誉会員とする。但し熊本県薬剤師会会員は会費2円50銭」を出すものとしている。

九州薬物展覧会では日本薬学会の支援を受けるため、三善委員長名で次の文書¹⁴⁾を提出した。

拝啓 陳者貴会益々御繁栄奉南山候。来る七月上旬当熊本に於て別紙趣旨に依り薬物展覧会開設仕候に付、貴会会頭若くは代表者御来会被成下度、御承諾被下候はば本会の光栄不過之候。準備の都合有之候得ば、何等の御回答煩度、此段及御照会候也。追て開設月日は確定の上御報知可申上候。

四月一日 九州薬物展覧会委員長
三善清房 日本薬学会会頭 長井長義殿

肅啓 来七月熊本県熊本市に於て九州薬物展覧会開設致候に付、貴会に於て相当補助相成度、此段懇請致候也。

五月十四日 九州薬物展覧会委員長
三善清房 日本薬学会会頭 長井長義殿

この両書面を受けて長井会頭は5月20日午

後4時より福田家で評議会¹⁴⁾を開き、九州薬物展覧会の際会頭および幹事・常議員の中1名を派遣する事ならびに同会に金100円を補助として寄贈する事を決議した。又、同日午後7時同所に小野瓢郎、大岩乙三、岸田吟香、小林九一、志村釵七郎、鈴木正肥、堀口広助、丸山長四郎、吉田安五郎、和氣達清の10氏を召集して、既に九州薬物展覧会「委員長より蒐集委員囑託せられたるありと雖も右に拘わらず更に本会頭より依頼す。抑々薬物展覧会開設につき第一必用なるは陳列品の類多なる」と珍奇品とに在り、然れ共各自に於て私有するは甚だ僅少なれば可成官庁に就き借用せざれば為すこと能わず。諸君之を領し尽力せられんことを」¹⁴⁾要望した。参会の委員は協議して小野瓢郎・鈴木正肥の2名を主任に選び、出品予定目録を5月27日迄に主任に提出し、5月29日委員会を開いて重複品目を取捨し、現品は6月5日迄に主任の所に集め、6月10日迄に荷造り発送することを決めた。

5月20日評議会決議に基づいて次の返書¹⁴⁾が三善委員長宛発送せられた。

拜復 四月一日附を以て来る七月熊本市に於て九州薬物展覧会開設に付、本会々頭若くは代表者云々御申越之趣了承致候。本月廿日役員評議会の決議に依り会頭並びに幹事常議員の内一名出向可致候。此段及御回答候也。追て開設日時決定の上更に御申越相成度候。

五月廿六日 日本薬学会々頭 長井長義
九州薬物展覧会委員長 三善清房殿

来る七月熊本市に於て九州薬物展覧会開設に付、補助費として金百円寄贈致候。此段申進候也。

五月廿六日 日本薬学会々頭 長井長義
九州薬物展覧会委員長 三善清房殿

4月18日熊本薬学校で開かれた熊本県薬剤師会通常総会¹³⁾で、三善委員長は展覧会の経過説明をする。4月27日熊本県薬業組合(頭取 渡辺敬右衛門, 副頭取園部交雅)定期総会¹⁴⁾が熊本市洗馬町都亭で開かれ、三善委員

長は展覧会に協力を要請し、組合員全員会員となり応分の尽力をすることを決議した。

九州薬物展覧会は7月中旬開備の予定であったが、会場の都合で8月7日より10日までの4日間、熊本市南千反畑町観聚館で開催¹⁵⁾する事となった。時日の切迫と共に事務次第に繁忙となり、熊本薬学校の事務所とは別に手取本町鎮西館に委員事務所を設け、毎日委員が輪番出勤で執務した。

7月27日東京の小野瓢郎・小林九一両氏熊本に到着、早速その指導のもとに会場整備に当たる。8月5日会長井頭一行は熊本に到着、九州薬物展覧会では早速長井会頭を展覧会名誉会頭に推戴する¹⁶⁾。名誉会頭とは言うものの展覧会の一切の指揮監督を一任したものであった。

8月7日(土)午前9時より県会議事堂で九州薬物展覧会発会式¹⁶⁾を行なう。熊本県知事代理山之内書記官・茨木第六師団長等多数の来賓を加えて参会者約300名。閉式後参集者を観聚館の展覧会に案内する。午後は一般参観者の縦覧を許し、入場者600余名。8月8日(日)は入場者2,300名。8月9日(月)は来会者1,000余名。この日は午後5時から一日亭本店で園遊会を催し、参加者約300名。8月10日(火)は入場者約1,300名。午後5時観聚館集談所で閉会式を行なう。4日間の縦覧者は合計5,500余名であった。8月12日長井会頭は長崎に向けて熊本を出発した。

8. 長井博士一行の講演会

九州薬物展覧会について、更に特筆すべき事は、長井長義日本薬学会々頭が、熊本往復の途次各地で薬学に関する講演を行ない、薬学の振興普及に努めた事である。

長井博士の訪熊日程¹⁷⁾は次の通りであった。

7月27日	7:25	新橋発
	14:25	静岡着
7月29日	7:20	静岡発
	13:55	名古屋着
7月30日	7:25	名古屋発
	12:50	京都着

7月31日	6:40	京都発	
	9:00	神戸着	
	10:05	神戸発	
	16:47	岡山着	
8月1日	12:00	岡山発	
	18:42	広島着	
8月3日	9:00	宇品発	汽船
	10:00	厳島着	
	17:30	厳島発	汽船
8月4日	8:00	門司着	
	9:30	門司発	
	12:08	博多着	
8月5日	10:45	博多発	
	11:01	二日市着	
	15:01	二日市発	
	19:28	池田着	
8月12日	8:48	池田発	
	22:00	長崎着	
8月14日	8:00	長崎発	
	18:30	博多着	
8月15日	13:00	博多発	
	15:30	門司着	
		赤馬関着	小汽船
8月17日	10:00	赤馬関発	汽船 (薩摩丸)
8月18日	8:30	神戸着	
	12:30	三宮発	
		梅田着	
8月20日	16:00	梅田発	
		京都着	
8月22日		京都発	
	19:30	新橋着	

日本薬学会からの派遣者は、長井会頭の他に平山増之助常議員・鈴木正肥書記の3名であったが、西崎弘太郎(第二高等学校薬学科教授)・大島太郎(薬学士)・永井一雄(薬学士)・福地才次郎(東京衛生試験所技手)・太田信(東京薬品粉末合資会社¹⁸⁾社員)が同行した。平山常議員は病気のため厳島から帰京したが、各地から同行者があり、即ち宗田友次郎(大阪製薬株式会社¹⁹⁾取締役)・金沢巖(薬学得業士)・石井勇吉(広島県薬剤師会幹事)・松崎巖(福岡県薬剤師会幹事)が同行し、熊本到着

時には同行者は10名となった。

7月27日午後静岡¹⁶⁾到着。午後5時静岡市紺屋町浮月楼(徳川従一位公の旧邸)で静岡医師会・静岡薬学会共催の懇親会。席上長井会頭は地方名士・医師・薬業家80余名に、「薬学の必要に就いて」説話した。

静岡薬学会(会頭松井彦三、会員数37名)はこの年7月5日静岡市寺町少林寺で発会式を挙げたばかりであるが、九州薬物展覧会が結成動機の一つとなった事は、その趣意書¹⁵⁾に「九州に薬物展覧会あらんとし其の準備に汲汲たり。(中略)嗚呼憶ふて茲に至れば余輩等背汗の至に堪へず。又以て奮然として起たざるを得ず」とあるのを見ても明白である。

7月28日午前宿舎大東館に薬学薬業関係者に「薬業者将来の方針について」講話。午後2時静岡市追手町静岡教会で一般講演会。演題・演者は次の通りである。

生産と下等生物学

並に田原氏消毒燈に就て	西崎弘太郎
ニコチンの毒性に就て	平山増之助
薬物工業学に就て	長井 長義

このうち後の二題については薬学雑誌188号(明治30年)に附録として講演速記が出ている。当日の聴衆は200余名であった。

7月29日午後5時、名古屋師団構内偕行社で尾張薬剤師会(会頭安香堯行)主催の講演会¹⁶⁾。演題演者は次の通りであった。

酒類醸造法に就て	西崎弘太郎
粗悪薬品の濫造に就て	平山増之助
薬学の将来	長井 長義

終って同所で懇親会。丸文旅館に投宿。

7月30日京都での講演会。京都の薬剤師会・薬学会・薬業者有志が発起し、有志代表小泉信太郎より日本薬学会会頭宛講演要請したものであるが、手許に資料無く詳細不明である。

7月31日午後岡山到着。後楽園鶴鳴館で講演会¹⁶⁾。演題・演者は次の通り。

ステレオヘミーに就て	永井 一雄
薬剤師の教訓	平山増之助

飲料水に就て

長井 長義

終了後、同園延養亭で深夜まで懇親会。大黒屋に投宿。

8月日夕刻広島到着。

8月2日午後2時、広島市水主町広島県会議事堂に、広島県薬剤師会(会頭蟹江大次郎)・広島薬学会(会頭溝口恒輔)両会員を集めて「薬剤師業務の切要な問題について」長井会頭の講話¹⁶⁾。午後3時同所で一般講演会¹⁶⁾。演題・演者は次の通り。

薬化学研究の方針	永井 一雄
田原氏消毒燈	西崎弘太郎
裁判化学に就て	平山増之助
薬物工業学	長井 長義

終了後、真菰春和園で懇親会。

8月3日厳島に渡航。紅葉谷岩惣滝の茶亭で懇親会。平山常議員は病後の体調すぐれず、厳島松岡亭で数日保養後帰京することとなる。

8月4日朝、門司港上陸。旅館川卯で朝食。正午過ぎ博多着。午後3時40分福岡市中州の共進館で講演会²⁰⁾。演題演者は次の通り。

薬化学	永井 一雄
工業と下等生物との関係	西崎弘太郎
薬業家と公衆衛生との関係	長井 長義

聴衆約200名。終了後中州福村楼で懇親会。席上長井会頭は「薬学の範囲及び薬業家・薬剤師の任務について」説話。

8月5日午前、福岡病院講堂²⁰⁾に薬剤師・薬種商・医師のみを集めて長井会頭は「医薬品の現状について」講話。午後太宰府に詣で夕刻熊本市池田駅に到着。研屋支店に投宿。

8月7日午前熊本県会議事堂における九州薬物展覧会開会式で、長井会頭は「薬物展覧会の意義について」説明。

8月8日午前、県会議事堂で開かれた大日本私立衛生支会第7回総会¹⁶⁾で、長井博士は「消毒法について」特別講演。

8月11日午前、私立熊本薬学校で長井会頭は「薬剤師養成法・薬品改良について」講演。尚、長井会頭離熊後の8月15日偕行社で熊本軍医学会主催の次の講演会があった。

薬化学今日の発達に就いて 永井 一雄
・ 蓼酸の精製法について 大島 太郎

8月12日朝、池田駅を出発して長井博士は33年前に遊学した長崎に赴く。同行は溝口恒輔(第5師団軍医部附陸軍薬剤監)・小林九一(医科大学第一医院薬局員)・鈴木正肥・三善清房であった。

8月13日小島郷酒屋で歓迎会。

8月14日長崎出発、博多到着。

8月15日午後博多発赤馬関到着。同行は溝口恒輔・小林九一・鈴木正肥・蔵田孝貞(福岡病院薬剤部長)・大島健吉(福岡県技手)であった。阿弥陀寺町春帆楼に投宿。

8月16日午前春帆楼に参集した薬剤師・薬業家に「薬品の重要な問題点」について長井会頭は約2時間講話。午後赤馬関市観音崎永福寺で講演会²⁰⁾。演題演者は次の通り。

薬品に就て 溝口 恒輔
・ 衛生の真理に就て 長井 長義

聴衆400余名。終って阿弥陀寺町風月楼で懇親会。

8月17日朝、日本郵船神戸直行の薩摩丸に乗船。

8月18日朝神戸到着。午後大阪に着く。旅館加賀屋に投宿。同夜、平野町堺卯楼で大阪製薬株式会社重役と会食。

8月19日午後4時、借行社で開催された関西薬学奨励会²⁰⁾に長井会頭は参列し、1時間余にわたり特別講演。関西薬学奨励会は在阪の薬剤師・薬種商・売薬商有志が、主として大阪共立薬学校を支援し薬学の発展を図ることを目的として設立したもので既に有志会員50余名寄附金額3,000円に達したので、大前寛忠を会頭に選び長井博士の来阪を好機として発会式を挙げたものである。

8月20日10時、道修町薬種卸仲買商組合事務所²⁰⁾に薬剤師・薬種商を集め長井博士は「医薬改良について」極めて酷しい講話。午後京都に出発。京都市木屋町柵竹に投宿。

8月21日京都の有志による長井博士慰労舟遊会。

8月22日夕刻東京に戻る。

9月1日、福田家で日本薬学会評議会²⁰⁾。長井会頭は九州薬物展覧会および往復の途次各地で行った講演会の概況を話し、それに基づいて尽力せられた各位の功績を讃えるため日本薬学会会頭名で感謝状を贈ることを決議した。

9月3日、東京府下の薬剤師・薬種商を浜町一丁目の日本橋倶楽部に集め、長井会頭は「薬品改良について」講話²⁰⁾。終了後柳橋柳光亭で長井博士慰労会を催す。

9月18日午後2時医科大学薬学科教室で日本薬学会例会²⁰⁾開催。長井会頭は「薬学奨励に関する効力」と題して講演し、この間の状況を総括した。

熊本往復の途次の長井会頭を中心とする講演・講話は二種に分ける事が出来る。一は一般を対象とした薬学普及のための講演会であって、薬学の効用・薬学の必要を強調するものであった。一は薬学・薬業者を対象としたものであり、市場に粗悪な薬品の范濫している原因は、薬学者が自ら医薬品の品質改良をはからず、薬剤師が特権に甘んじてその職責を放棄し、政府も薬品巡視の規則を遵守せぬことにありとして、薬学薬業関係者の責任を追求した極めて酷しいものであった。

9. 九州薬学展覧会閉会後の展望

明治30年(1897)9月18日午後6時、仙台市内の梅林亭で、宮城薬学会の発会式を兼ねて長途九州に出張した第二高等学校医学部薬学科西崎弘太郎教授の慰労会が開かれた。席上西崎教授は「九州薬物展覧会について」語る²¹⁾。「本年8月を期し熊本市に於て九州薬物展覧会を開くの通報あり。これ地方人士薬物展覧会を開くの嚆矢なるを以て、大にその熱心に感じ、本会を代表し、長井・平山氏一行と共に静岡・名古屋・京都・岡山・広島・福岡各地を過ぎ8月5日熊本に入れり。途上此一行が如何に歓待せられたるか日本薬学会雑誌に明なり。是れ長井博士の名声赫々たるに職由するとは雖も、亦近年薬学振興の徴として見るべし。途上平山氏に聞く所あり。由

来九州人士質朴敢為、事に当たりて挫折せず、其私立薬学校を設立するに当たりてや、明治20年前後²²⁾にかけり薬学が未だ世に紹介せられざるの当時、実業家が能く規約を守りて学校設立の爲め尽力し、今日となりては学校亦隆盛に趣き随て今回此大会を開設するに至れりと。九州に入るに及んで余は其真なるを知れり。薬物展覧会開設に就ては、官民協同事に従ひ業を捨て職を忘れ、其所為狂するばかりなり。物品の蒐集・陳列・送還等苦心惨胆名状すべからずして実に吾人の驚嘆に堪えざる所なり。(以下略)」

西崎教授のこの談話は、実際に九州薬物展覧会を見聞して来ただけに、如実に当時の実状を物語り真に迫るものがある。まさに熊本薬学薬業関係者は、業を捨て職を忘れ狂するばかりの熱中で展覧会を成功させ得たのである。然しこれには予想外の多額の経費を必要とした。

九州薬物展覧会の収支決算は、手許に記録が無いので詳細は知る由も無い。熊本での寄附金は三月末で既に600円²⁴⁾に達した。熊本県薬業組合の協力¹⁴⁾を得て、この金額は恐らく倍加したであろう。日本薬学会は既述の如く100円を支援し、大阪では薬種商乾新兵衛・牛田幾輔両氏が中心となって寄附金¹⁴⁾を集めて贈り、岡山県薬剤師会会頭佐藤直¹⁴⁾は、同地の同学同業者に募金して熊本に贈り、又、東京では募金した161円を送金した記録がある。長井薬学会々頭は帰京後予想外の経費を心配して更に熊本のために募金を要望せられた。これに応じて東京では更に有志に呼びかけて101円を送金し、大阪でも宗田友次郎が中心となって100余円を追徴寄贈²³⁾した事が見えている。

予想外に多額の経費を要した事も原因であったであろうが、第1回九州薬物展覧会と銘打って、第2回第3回と続けるつもり九州でも、この熊本を最後として、遂に同種の会は計画される事は無かった。

明治31年香川県薬剤師会および高松薬業組合は、明治32年月四国薬物展覧会²⁵⁾を開催して薬業の発達をはからんと企画した。然し経

費の面で無期延期となった。日本薬学会でも、薬学の黎明期から発展期を迎えて、実物展示よりも学術発表に重点が置かれ、この後は薬物展覧会を主体とする行事は行なわれなかった。即ち薬物展覧会は熊本を最後として全国的規模のものは開催されず、誌上および学会における口頭発表活動に重点が移行した。

以上が明治20年代における薬物展覧会の顛末である。

引用文献及び註

- 1) 明治25年(1892)1月17日の第12回総会で、東京薬学会は日本薬学会と改称した。
- 2) 日本薬学会沿革史(以下沿革史と言う。編輯委員長平山増之助。明治43年(1938)6月以降の薬学雑誌に附録として分載)。26頁
- 3) 沿革史 127頁
- 4) 同上 135頁
- 5) 薬学雑誌 181号(明治30年), 290頁
- 6) 沿革史 79-87頁
- 7) 同上 119-124頁
- 8) 同上 126-158頁
- 9) 薬学雑誌 149号(明治27年), 714頁
- 10) 沿革史 134頁, 165頁
- 11) 第一高等中学校医学部は明治27年(1894)9月から第一高等学校医学部となった。
- 12) 薬学雑誌 181号(明治30年), 290-291頁
- 13) 同上 183号(明治30年), 504-507頁
- 14) 同上 184号(明治30年), 604-629頁
- 15) 薬学雑誌 185号(明治30年), 722-730頁
- 16) 同上 186号(明治30年), 821-843頁
- 17) 沿革史 178頁(薬学雑誌(明治30年)各地通信により一部補正)
- 18) 胃散本舗太田信義が売薬原料を水車で粉末したことに始まり、小石川区氷川下町59番地に明治29年6月設立。
- 19) 社長日野九郎兵衛、明治30年2月1日設立認可。
- 20) 薬学雑誌 187号(明治30年), 911-939頁
- 21) 同上 188号(明治30年), 1022-1023頁
- 22) 私立熊本薬学校の設立認可は明治18年(1885)3月1日であり、平山増之助は同校初代の校長であった。
- 23) 薬学雑誌 189号(明治30年), 1129-1133頁
- 24) 同上 182号(明治30年), 394頁
- 25) 同上 204号(明治32年), 186-187頁

Summary

The pharmaceutical Exhibition was the greatest event of the Japan Pharmaceutical Association in the Meiji era. Four exhibitions were organized, the 1st in 1890 at

· Tokyo, the 2nd in 1893 at Tokyo, the 3rd in 1895 at Kyoto, and th 4th in 1897 at Kumamoto. The 4th was chiefly promoted by the Kumamoto persons concerned. On this occasion, Dr. Nagai, the president of

· the Japan Pharmaceutical Association, did his best to diffuse the pharmaceutical knowledge by his public lectures at various places on his way to Kumamoto.

「生薬学」と訳した大井玄洞について

浅野正義

On Gendô Ooi, who first translated Pharmacognosy into Japanese Expression “Shôyaku-gaku”

Masayoshi ASANO

日頃生薬学に携わる者にとって Pharmacognosie を「生薬学」と誰が訳したかは興味ある問題である。初めて訳したのは大井玄洞であることは恩師清水藤太郎先生が明治前日本薬物学史第1巻38頁で指摘されている通りである。即ち「明治13年(1880年)大井玄洞は生薬学1巻(実際には3巻)を著わして西洋生薬学を専門的に講述した。本書は独逸ウイカンド著の生薬学を基本とし、生薬の組織学、動植物生薬全般に渉り講述したもので近代生薬学書の嚆矢である。彼は本書に於て初めて Pharmakognosie を『生薬学』と訳定した。本書は同17年(1884年)第2版同20年(1887年)第3版を発行した。なお大井玄洞は同13年「生薬学図」1巻を著わして動植物の生薬学的解剖図253種を記載した。これを西洋生薬学図譜の嚆矢とする。」と述べられている。

この「生薬学」の第1頁には前言として、「此書ハ独逸国マクトヒルヒ府ノ大学校教授ドクトルアルベルトウイカンド氏撰著ノフアルマコグノシエ生薬学(本校学則ニ之ヲ薬品学ト云フ、其字義穩ナラザルニ似タリ故ニ生薬学ト改称ス)ヲ本トシ…」となぜ生薬学と訳したかについて述べている。本校学則の本校とは東京大学医学部である。同7頁、生薬学緒言に生薬学の定義を述べ、次いで「其之ヲ講究スルノ学フアルマコグノシエヲ生薬学ト名ズク往時ハ此学を薬物学中ノ1部分ト為シ併論セント雖モ較近医事薬物ノ二学駸々乎トシテ進歩ン復前日ノ薬物併

論ヲ以テ目視ス可ラザルノ域ニ至レリ」と分離独立の必要を説いている。

この「生薬学」初版の奥付に「生薬学附録銅版図五百余一冊続出」と図譜出版の予告が出ている。「生薬学 附録図」(東京薬科大学所蔵本による)巻ノ1は本文1巻15頁にある甘草の第1図から始まり88図バルバチマオ皮の横断面で巻ノ1は終り、巻ノ2はブルヌスパジュスリンネの横断面第1図からコルシキウム子の第131図、巻ノ3は石松子の第1図から水蛭の第23図で終わっている。この附図には説明はなく本文中にも図についても細胞組織の細かい説明はない。

大井氏はこの「生薬学」出版に先立ち明治13年5月に「毒物学」を出している。その序文は永松東海が書いており「大井君ハ大学医学部化学毒物学ノ教員タリ」と出ており、化学の教員も勤めていたことが分る。彼が出した本の内ではこの本が最も早く、内容も体裁も共に一番よく出来ている。それに反し「生薬学」は印刷も悪く、生薬学図の図にいたってはこの毒物学の実験器具の図に比べると著しく粗雑である。

前記2書に続いて「衛生汎論」(順天堂大学所蔵本による)を出している。本書の扉には陸軍一等軍医正兼東京大学医学部総理心得石黒忠憲 東京大学医学部教授 独逸国生理学専門プロフエスソルドクトルエチーゲル講義 東京大学医学部助教 大井玄洞記述となっている。

この書の小引(序文)によればチーゲルの講義を学外からも聴きに來るものが非常に多くそのため、大井が翻訳して出した旨書いてある。富士川游の日本医学史(743頁)に本書について「大ニ当時ニ行ハレ」とあるように相当数出た模様である。なお衛生学には当時一般の関心が多かったものと見え柴田承桂が明治12年(1879年)に衛生概論を、15年(1882年)に丹波敬三訳 柴田承桂校補 普通衛生学が出ています。

一方報文類では明治11年(1878年)11月に東京薬学新誌第1号(くすり博物館所蔵本による)に双蘭菊種属ノ植物中有力分(アコニチネ)並ニ其類塩基ノ試験新説「附蝦夷人毒箭ニ用フル毒草ノ試験成跡」という8頁にわたる実験報文を出している。難物と定評のあるアコニットの成分研究ではあるが当時の水準からしてもそう出来のよい実験報告とは思われない内容である。

大井玄洞の著書報文類はこの外には見当たらない。一時期にこれだけ活躍した人だけにどんな人物であったかに筆者は関心をもった。彼の著書「生薬学」を携えて晩年の朝比奈先生を尋ねたことがある。先生もこの本を御覧になられるのは初めてであり、大井玄洞の名前は知っているが、面識はなかった由であった。先生が御面識がないとすれば東大の生薬学教室には早くから没交渉であったことが分る。

その後彼に関する資料を捜している内に、高橋勝介著「大井玄洞と鳩山一郎」という本を入手した。これを見て彼の履歴と政治活動の様様を知ることが出来た。

以下この本の記載を参考にし、その後入手した資料に基いて大井玄洞について記述して見ると、彼は安政元年(1855年)2月15日、現在の石川県金沢の医者之家に生れた。長じて加賀藩の明倫学堂に入り、慶応3年(1867年)卒業、更に藩の道成館に入学、ここで英語を修得し、明治2年(1869)卒業し、更に藩費留学生に選抜されて開成南校(東京大学の前身)に入学ドイツ語を習得、明治6年(1873年)1月卒業と同時に文部省上等出仕を拜命、第一

大学区医学校勤務、ドイツ語教場掛兼通弁の任に当る。9年(1876年)11月東京大学に新しく製薬学通学生教場を設置されるに及んでこの助教になっている。この助教は正規の教授教員とは相当の開きがあった模様である。

「東京大学医学部一覽」明治10年(1877年)というパンフレットがあり、その第2章総理教員及職員の項を見ると総理 池田謙齋 東京 総理心得 長與専齋 長崎 以下教授陣の姓名、担当課目、出身地が出ており薬学に関係のある処では

教員 製薬学 ドクトル ゲオルク マルチン 製薬化学及算術 オスカル コンシエルト 薬剤学教授 榎村清徳 東京 製薬学 柴田承桂 愛知 化学 助教 熊沢善庵 堺 次いで製薬学 助教 大井玄洞 石川と出ており、この外同じく助教で動物及植物学 松原新之助 島根 物理学 助教 飯盛挺造 佐賀 と出ている。

この一覽の製薬学医学生学科課程第2期、第3期とに薬品学が入っており、この薬品学を彼が生薬学と改めたことは「生薬学」の序文の処に書いてある。

東京大学五十年史によれば13年(1880年)3月「助教 大井玄洞は願いに依り其の任を解かれたり」とある。又同書第2編 学部の部、13年(1880年)4月 下山順一郎 丹波敬三何れも助教に任ぜられ 同月丹羽藤吉郎教員に囑託せらる」と出ている。

東大をやめた13年4月 郷里金沢医学校の懇望により同校の教諭となって赴任し、傍ら石川県立金沢病院の薬局長を兼務し、又内務省主管金沢医術開業試験委員も拜命している。18年(1885年)12月にこの3つの職を辞任し、翌19年(1886年)1月から同年10月までドイツに遊学している。10月に帰国後直ちに陸軍に入り陸軍二等薬剤官(中尉相当官)になり陸軍病院薬剤課長心得になっている。明治19年改正官員録(国会図書館所蔵本による)を見ると一等軍医正(大佐相当官)永松東海、一等軍医賀古鶴所が一緒に名を連ねている。ちなみに陸軍薬剤官制度と医術開業試験規則は16年(1883年)に制定されている。

一方東京薬学校(東京薬科大学の前身)創立者校長藤田正方がこの年9月9日急逝し、山田薫、熊沢善庵と大井が交替で校長を勤めており、下山順一郎が校長になる21年(1888年)11月6日まで続いたことになる。20年(1887年)2月に陸軍軍医学校教官兼務も仰付かっている。陸軍軍医学校五十年史(国立国会図書館所蔵本)によれば22年(1889年)7月1日一等軍医森林太郎(鷗外) 二等薬剤官大井玄洞 三等薬剤官飯島信三の三名が兵食検査委員になって食糧のカロリー等について研究報告を出している。彼が何を教えていたかについては同書に記載はないので不明である。なお同書によれば同校の機関誌に大井は縋帯の吸収力比較試験報告を出している。

23年(1890年)3月に一等薬剤官(大尉相当官)になり、第1師団軍医部部員に補せられ、明治27年(1894年)6月に日清戦争に出征し、28年6月に凱旋している。次いで30年(1897)4月陸軍薬局方(第1版)編纂委員を拝命している。そのことは同局方第2版(国立衛生試験所所蔵本による)の緒言中に一等薬剤官として載っている。この1版編纂で彼の学問的仕事は終わっている。30年8月第2師団軍医部部員に補せられ、翌31年(1898年)4月衛生材料廠仙台支廠長に補せられ、32年(1899年)9月予備役に編入されている。なお33年5月北清事変発生に伴い召集され、宇品貨物廠附を命ぜられ、事変の終ると共に10月召集解除になり彼の薬剤官生活も終わっている。

薬剤官生活が終わってから当時の小石川区大塚窪町27番地に居をかまえ、衛生材料ガーゼ脱脂綿を商うようになった。商売の傍ら区議会議員をへて府議会議員になり、彼の政治生活が始まっている。政治生活の様子は本稿に関係ないので省略する。昭和5年(1930年)8月15日、伊豆の別邸で逝去し、世田谷区千歳烏山の万福寺に葬られる。

彼には長男成章氏、長女孝氏の2児があり、窪町の住居も戦災に遭い資料は何もない由である。ただ府議会議員時代、幾度も出水を繰返し附近の住民に災をもたらしていた江戸川改修工事に力を尽し住民から慕われその醜金

で建てられた胸像が現在も江戸川公園の一隅から江戸川を見下ろして建っている。孫の五十鈴氏(大畑家に嫁す)宅には府議会議員の盛時をしのばせる堂々たるエフ12号の油彩の肖像画と葬儀に際しての政友会総裁犬養毅自筆の弔辞、高橋勝介著「大井玄洞と鳩山一郎」等が保存されている。

本稿を書くに当たり大井が大学の助教・薬剤官・政治家へと変って行く理由について次のようなことが考えられる。

外国からの学問をとり入れるのに急な時代は外国語にすぐれている者は非常に有利であったが、或る程度の年数がたつにつれ外国語を修得しそれぞれの専門の学問を修めた者が続出して来ると単に外国語だけで専門の知識を伴わない者は学問の世界ではだんだんに活躍の場が狭くなるのではないか。東大時代に下山・丹波が卒業する前に辞表を出したのも、本科学生である下山・丹波を直接教える機会はなかったと想像されるが、大井は明治10年以前から助教であり、その年に両者が学生として入学し卒業と同時に助教になることを大井は見ぬいていたのではないかと想像される。

日本薬学会「百年ひとむかし」7頁中央の写真、下山が中央にその右側に丹波がその右に大井(髭といい風貌は銅像とそっくりである)が写っている。この写真でも下山・丹波に先輩格である大井が席を譲っているのも不可解に感ぜられる。

同じ助教であった植物の松原新之助も同じく飯盛挺造もその後長く学問的地位を保ち、特に飯盛はその専門の物理学の著書は昭和の初期でも専門書店の店頭にあった。

陸軍に入った時も明治10年に本科生として入学した賀古鶴所が陸軍病院で一等軍医で上官であり、軍医学校に行っても賀古と同級生の森鷗外が一等軍医で上官になっていた。

薬剤官をやめてから衛生材料を商う身となったが、元来当時としてエリートであった彼が政治家(現在のとはその気概に於ても相当の開きがあった模様)を志したのではないかと想像される。何分にも資料が不十分で想像

の域を出ない。「大井玄洞と鳩山一郎」の著者の許に資料があるのではないかと思ひ著者の所在を鳩山氏の秘書の御協力で相当調べたが現在まで不明である。

本稿執筆に当たり東大生薬学教室に大井に関する資料の在否を東大名誉教授柴田承二博士にお尋ね致した処「ない」との由であったが先生から御親切に根本曾代子女史に問合わせて頂き両先生から種々御助言を頂きました。

又国立衛生試験所所長下村孟博士，順天堂大学酒井シヅ博士，公定書協会江本龍雄氏，東京薬科大学川瀬教授，内藤記念くすり博物館から資料を頂き，鳩山邦夫代議士秘書齋藤国一氏，文京区教育委員会文化財調査員戸畑忠政氏に胸像ならびに御子孫の所在について御協力を頂きました。

茲に各位に深く感謝申し上げ厚く御礼を申述べます。

中国におけるジャコウジカの人工飼育

伊 藤 和 洋

On Breeding of Musk Deer in China.

Kazuhiro ITO

1. 麝香の名称出典などについて

李時珍は本草綱目第五十一、上の麝の項に「麝は香気が射るように遠くまで届くから麝という」と記し、鹿の下に射るという字を書くというようなことを言っている。また同項に「梵書には麝香を莫訶婆伽^{モカバガ}という」と明記している。しかし梵書つまりサンスクリットで麝香は MUSKA といい、本来は鞆丸の意味である。その後、この MUSKA はペルシャ語の Mushk になり、ギリシャの古名 Moschus の語源となり、これがジャコウジカの学名の属名になり、種名にも用いられている。

なお、本草綱目の「莫訶婆伽^{モカバガ}」は、蒙古語(ダウル名)でカバルガというし、ソロン語(中国東北の嫩江流域、フルンビイル、新疆ウイグル自治区などに住むソロン(索倫)族の言語)でもカバルカと称し、アルタイ山脈(西シベリアから蒙古にまたがる)地方でも Kabarga というから、これらに由来すると思われる。

序にチベット語では Rati(ラッティ)、シェルパ語では Rakti(ラクチ)といい、ネパール語で Kasturi(カストゥリ)と発音し麝香ジカをカストゥリ・ムリガ(Kasturi mriga)といている。麝について本草綱目には射父、香麝などの文字が記されているが現在の中国では麝香のほか一般には 獐 獐^{シヤンチヤン}と称している。麝香の文字は神農本草経の上薬に明記されているが、その序録によると上薬に属する薬

物120種は君薬とし、主として生命を養う薬物である、としている。神農本草経本文の記載によると、この麝香を「久しく服用すると邪気を除くので夢寤(夢をみて飛び起きる)したり、^{メンビ}魔寝(悪夢にうなされること)がなくなる」と記し、「川谷に生ず」と明記してある。この川谷というのは何とも解せないが、多分次々項の熊脂(熊胆)の産地として山谷に生ずとあるように、山谷の誤りと思われる。本草経集注には「中台の川谷及び益州、雍州の山中に生じる」と明記してある。中台は現在の江西省で、同省には武功山脈がある。益川は漢代の州名で今の四川省の地であり、雍州は現在の陝西、甘肅および青海省の一部の地であるから、これらの地方の山中に生息していることを記していることになる。またその形態は麝^{カバガ}に似ていて、栢葉(コノテガシワなどの類の葉)を常食とし、また蛇を噉うというようなことも記されている。麝は角がなく雄の上あごの犬歯がさば状に口外に出ている揚子江などの水辺に好んで住む小型のシカの種類である。

2. 中国産ジャコウジカの種類について

中国動物学報(1963年9月、15巻第3号)に発表された中国科学院動物研究所の高耀亭氏によると、中国には次のような三種の麝香ジカが生息するとされている。

- ① 馬麝(Moschus sifanicus Przewalski)
- ② 林麝(Moschus berezovskii Flerov)
- ③ 原麝(Moschus moschiferus var. sibiricus)

cus Pallas)

この馬麝は体形が一番大きく、身長 85~90 cm, 肩高 50~60 cm で吻は長い。大きいので馬麝と称する。林麝は体形が小さく、身長 70~80 cm で肩高 50 cm で吻は短い。一番小さいのでコビトジャコウジカとかマメジャコウジカと称する。中国で人工飼育されているのは主としてこの種類である。

原麝は一般にはシベリアジャコウジカと称するように中国東北地方吉林、黒竜江省、内蒙古などに生息し、その大きさは前二者の中間で吻は短い。

3. 人工飼育の開始

中国におけるジャコウジカの本格的な人工飼育は1958年に始まると思われる。というのは、その16年後つまり1974年2月20日付の中国通信が成都20日、新華社電として「四川省の麝香鹿人工飼育場」という見出しでその実情を報道し、その4カ月後の8月には雲南省での飼育状況を発表し、11月の初めには陝西省における麝香鹿の飼育について報じているが、何れもその開始を1958年としているからである。最初の四川省における人工飼育は西北部の川西林業局で1958年来、人工飼育試験が着手され、1973年の純増殖率は24%に達し、山東、湖北、広東、吉林などの各省に40頭送り出し、現在子鹿50頭を育てていると報じている。また麝香ジカの生体から麝香を採取することに成功して、その生産量は前年の20%を上廻っていると付記している。そしてこのような前人未踏の道は「真の知識というものは直接的経験をその源とする体験の積み重ねによって得られる」という指導者の教えに従って開拓努力をしたものであるという談話まで掲載されている。また同年6月21日の中国通信速報は20日の北京放送で雲南省の野生動物とその保護、利用などについて紹介し、麝香ジカを飼いならす仕事も続けてきて大きな成果をあげていることを報じている。それから4年後の1978年の中国通信中央電視台速報の11月1日号は1958年に建設した陝西省鎮坪県の麝香鹿飼育場での飼育成果を紹介してい

る。設立当初、該地の農民が捕獲した23頭を飼育し始めたが飼料の問題や疾病などで9頭に減ったが20年後の1978年には200余頭に殖やしたと報じている。この実験飼育場で人工飼育に成功した麝香ジカの群れに餌を与えている従業員の写真は、人民画報に掲載されているし、中国画報の1973年の3月号にもすでに紹介されている。

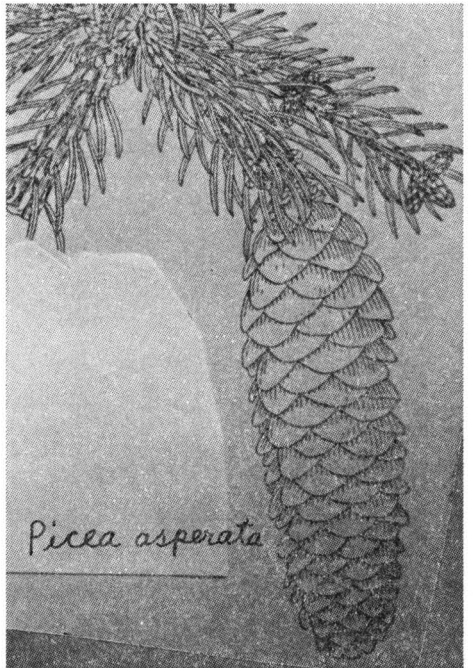
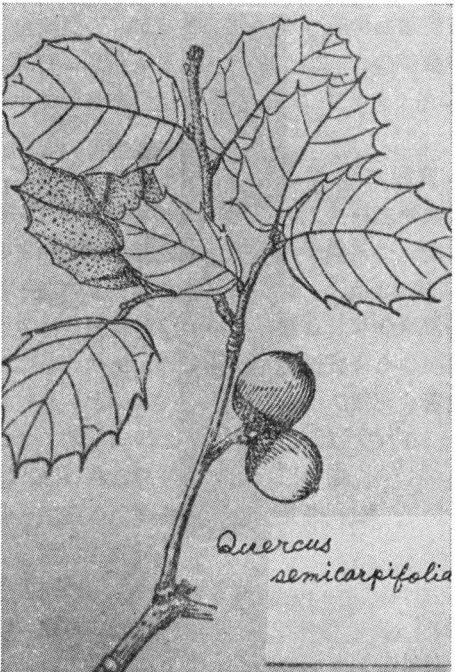
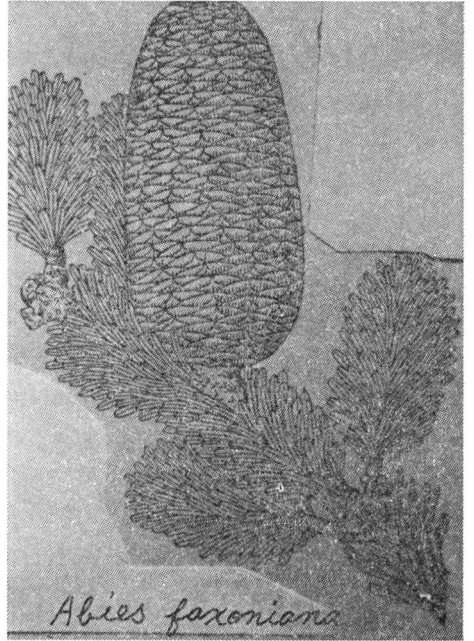
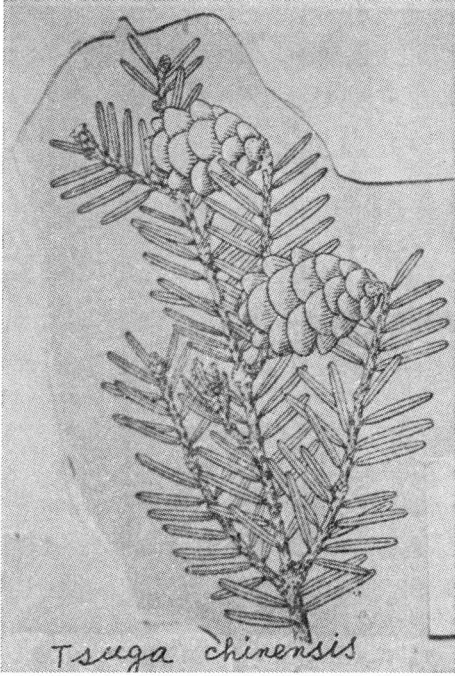
☆ ☆ ☆

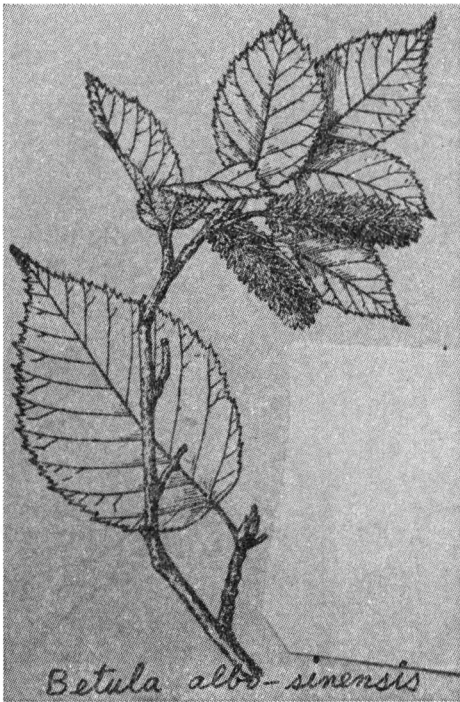
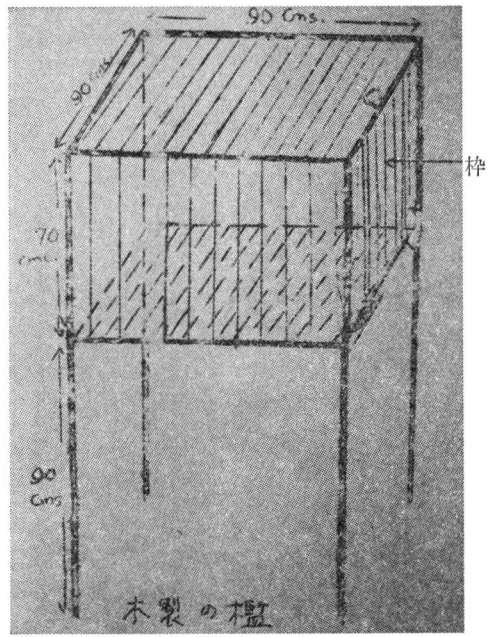
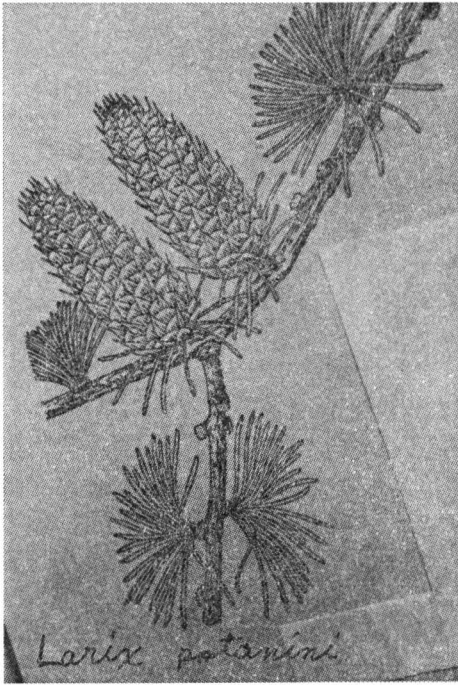
さて、1979年にネパールの野生生物保護事務所の生態学者3名(団長 ビスタ氏)が中国の麝香ジカの飼育法の調査のために同国を訪問し、その調査報告書を政府に提出している。

一方、昨1980年10月~11月に7度目の訪ネの機会があったので筆者はビスタ氏と再会し、上記の報告書を翻訳発表することについて快諾を得た。今回その一部の概況を御紹介して中国における麝香ジカの人工飼育の状況を明らかにしてみたいと思う。因に四川省の面積は日本の1.5倍である。

4. 報告書

(1) 概要 中国人民共和国でジャコウジカが生息している場所に設けられた飼育場を数カ所見学し、そこの公務員たちと討論した。最も成功している飼育場は四川省であり、飼育している種類は主としてコビトジャコウジカであった。四川省の首都成都の北西部にある3カ所の飼育場は大ヒマラヤの嶺の北限になっている。ここに見られる森林はネパールの東部ヒマラヤの森林と多少似ているが、高度 2,000~3,000m の地帯にはツガ属の *Tsuga chinensis*, カシ属の *Quercus semicarpifolia*, カエデ属の *Acer spp.* などが分布し、その下草としてメギの種類やノイバラなどの草本類が生えている。3,000~3,900m のところにはモミ属の *Abies faxoniana*, トウヒ属の *Picea asperata*, カラマツ属の *Larix potanini*, シラカバの仲間の *Betula albo-sinensis* などの樹木が自生し、3,900m 以上の山岳牧草地帯には夏期に野生のコビトジャコウジカが草を食べに現われる。





麝香採取用のスプーン

四川省には次の4つの飼育場がある。

1. 金黄山 (CHIN FUNG) (青城山?)
繁殖飼育場
2. 温江 (QUANG XIAN) 飼育採取場
3. 馬爾康 (MARKHANG) 飼育場
4. 米亜羅 (MIYALO) 飼育場

これらのうち 1. 2. は成都の 61 km から 70 km の間に位置し、製菓総局に所属し、飼育や麝香の採取を行なっている。

3. の馬爾康飼育場は成都の西 450 km に位置し、製菓総局に所属している。しかし成都から遠方にあるので麝香の採取は行なっていない。最後の米亜羅飼育場は成都の北西 280 km のところにあり、森林局に属して専ら麝香ジカの喧伝のために設けられたものである。したがってこの飼育場でも麝香の採取は行なっていない。これらの飼育場で飼育しているシカの種類は総て四川省の 2,000 ~ 3,500m の地帯に棲んでいる野生のコビトジャコウジカである。

金黄山飼育場では初め(1958~1965年前半)に数10頭のコビトジャコウジカが飼育されたが全部死亡してしまつた。その理由は飼育した場所の高度が低かつたため、この時麝香ジカの習性や生息地などについて少しわかつてきた。

四川省における総ての飼育場での飼育は1958年に初められたが、最初は生息地であらゆる捕獲法で捕獲して飼育場で飼つた。当初は不慮による死亡が多かつた。しかし1965年後半から飼育技術が進歩し麝香ジカの繁殖に成功したのでそれ以降、野生麝香ジカの捕獲は行なっていない。なお、ここで飼育と称するのは普通次のようなことを指している。

- ① 囲のある住居小屋での飼養法。
- ② 飼養のための飼料、給食法。
- ③ 養育と訓練。
- ④ 繁殖。
- ⑤ 麝香の採取。

コビトジャコウジカは飼育場では13年以上生きている。麝香は1才半になつた雄のシカから採取し始められるが、2才半から8才までが好適であり、それ以降、麝香の生成は毎

年次第に下向する。金黄山飼育場で生れた数頭の雄の成長ジカを温江飼育場へ連れてきて麝香を採取した結果、平均年当たりの収量は5~6gであつた。

温江飼育場には31頭の大人の雄林麝が木製の枠でできた檻の中で飼われていた。この檻の底の高さは地上から約90cm位で、その上部に長さかつ幅それぞれ90cm、高さ70cmの枠で囲んだ檻がある。各々の檻は互に接触していて個々に水鉢を置いておく。この檻の下はセメント製の排水溝を2列に配置して、上から落ちる糞尿を容易に清掃できるようになつている。

(2) 捕獲法について

コビトジャコウジカは普通海拔2,000~3,800mの間の地域に生息しているが季節によって多少移動する。つまり冬は高度の低い所に降りてくるが春と夏には食料のある所や隠れ場所や縄張りなどの如何で高地に上がる。彼等は何時とも同じ道筋を辿るし、一定した場所でも水を飲んだりする。このような習性は、この動物の居所や捕獲する方法を考える目安となる。

麝香ジカを捕獲するには新鮮な糞や足跡によつて行なう。雄の麝香ジカの居所を知るには雄が自分の尻尾の部分にあるカプリン腺の分泌物を樹木に付着させるので、この標しのある樹木を見付けてから捕獲法を色々考えるのである。

捕獲のための野外作業は麝香ジカが最も活動する朝6時から9時までと、夕方5時から7時頃までに行なわねばならない。また一般には冬の終りから春の初めにかけて捕獲するがその方法には罾と犬による捕え方がある。

④ 罾による捕獲法

糞をしたり水を飲みに出掛けるためのけもの道やカプリン腺分泌物で標しづけられた周辺や足跡のある場所に、ロープや若木で自動式罾を仕掛ける。罾の上を麝香ジカが通つて、足がかかると罾の輪がその下肢を引き締め生きてまま捕えることができる。この方法は時々脚や首を切断するような大

怪我をさせることがあるし、他の部分を外傷させてしまうことが多い。

⑥ 犬による捕獲法

犬には麝香シカの匂を覚えさせておき、追跡させてシカが完全に疲れはてるまで追い込むよう訓練しておく。通常2頭の犬と二人で早朝凡そ5時頃に出掛け、麝香シカのいることが確かめられた時にだけ犬たちを放つ。犬はシカを追跡して上の方に上がって行く。丘に逃げたシカはまもなく自分の縄張りに下って行く。犬は麝香シカが体力を消耗して最後の安全のために櫓のようになった倒木に登るまで追って行く。犬たちは木の下から見張りしながら断え間なく吼える。ハンターは倒木に登って輪縄でシカの首を押えて捕える。シカは木から降ろされ、ロープがはずされ竹製の籠に入れ、出来るだけ早く安全に運んで飼育場に移す。この捕獲法は外傷による死亡が少ないから罾による捕獲法より優っている。

1958年から1965年の7年間におよそ1,000頭のジャコウシカが捕獲されたが、1965年に温江飼育場では約200頭となり、そのうちの数頭は他の飼育場に送られた。ジャコウシカの死亡原因はパストゥーレラ菌の伝染によるものが殆んどであった。

(3) 飼育と飼料について

新たに捕獲されたジャコウシカは新しい環境に不安を感じて4～5日間、食物を食べないが、非常に空腹になると1日に1回食べ始める。半月後、これらのシカは段々と馴れてきて1日1回以上、餌を食べるようになる。そうなったら野生植物を与え続ける。シカは初め野生植物しか食べないが遂時、豆類や豆粕、穀類などにカボチャや白瓜などの多汁果実を混ぜて一緒に与えるようにする。動物の精神不安、動揺は飼育の初期における危機の一つである。

嗜好の餌

コビットジャコウシカの嗜好食物は高度、気候、生息する場所によって異なるけれども、

飼育場では野生の時と同じような組成からなる餌を与えて飼う。普通60～70種類の食物を好むように観察されるがその主なものは

A. 野生植物の葉、蕾、小枝。

- ① ハルニレの一種 *Ulmus wallichiana*
- ② サルオガセの仲間の *Usnea* sp.
- ③ ヤナギの一種 *Salix alba*
- ④ アーモンド
- ⑤ コウゾ(楮)
- ⑥ クワの実
- ⑦ クス
- ⑧ ヒマラヤザクラ (*Prunus ceraceoides*)
- ⑨ 石竹

B. 多汁の果実と根

- ① リンゴ、② 西洋ナシ、③ 西洋カボチャ
 - ④ 白瓜、⑤ シロカブ、⑥ キャベツ
- など。

C. 穀物、豆類

- ① トウモロコシ、② 大麦、③ 大豆
- ④ 空豆、⑤ ケツルアズキ、⑥ 豌豆

新鮮な緑色の食物は乾燥飼料と同様に与えることができる。穀物類の粉末を多汁質の食物と一緒に混合する。コビットジャコウシカは新鮮な緑色の飼料植物を好んで食べる。したがって9～10月の間、白瓜や西洋カボチャが得られる時期にこれらの食物を穴倉に保管し、冬期に新鮮な食物に代えて使用する。人参、キャベツ、リンゴのような多汁性食物もまた冬期に与える。新鮮な葉や乾燥している葉(サルオガセのような)も直接食べさせることができる。

飼料の調整

ある野生植物に白瓜、西洋カボチャ、カブなどを細かく刻んだものを加えたり、穀物の粉末を混ぜて与える。

⑧ 妊娠している雌の飼料(雌1頭、1日分の食料は総量726g)であって、その内訳は次のとおりである。

穀物(フスマなど)	130g
乾燥した葉や小枝	60g
多汁質の果物など	524g

カルシウム	10 g
食 塩	2 g
	合計 726 g

⑥ 育児中の食料（雌1頭，1日の総量
1,007 g）

穀物(フスマなど)を水でドロドロにしたもの	120 g
乾燥食料(サルオガセ)	50 g
新鮮な植物の葉	375 g
多汁質の果物	450 g
カルシウム	10 g
食 塩	2 g
	合計 1,007 g

⑦ 雌の食料（雌1頭，1日当たり総量
737 g）

フスマなどを水でドロドロにしたもの	120 g
サルオガセ	50 g
多汁質の果実など	500 g
カルシウム	10 g
食 塩	2 g
蛋白質	10 g
乾燥葉及び枝	45 g
	合計 737 g

魚粉または卵の粉末 5~10 gを個々のシカの必要に応じて給食させる。

⑧ 両性の交配時期の飼料（成長した動物1頭，1日当たり総量 690 g）

フスマを水でドロドロにしたもの	103 g
サルオガセ	75 g
多汁質の果実など	500 g
カルシウム	10 g
食 塩	2 g
	合計 690 g

⑨ 幼児の食料（幼児1頭，1日当たり総量
585~685 g）

フスマを水でドロドロにしたもの	100 g
サルオガセ	75 g
多汁質野菜(主として人参)	400~500 g
カルシウム	10 g
食 塩	2 g
	合計 585~685 g

もし、この配合飼料を食べなければフスマの粉を減らす。1日1gのヨードとカルシウムに相当する海草を与える。またカルシウムは骨粉の形で与える。必要ならばビタミン A, B, C, D なども飼料に添加する。飼育期間中ビタミン A, D, E をニンジンと一緒に添加する。フスマなど穀物の割合は、大豆または空豆 1/3 に対しトウモロコシまたは大麦を 2/3 とする。

(4) 飼料の給食管理について

ジャコウジカは日中休憩しているが朝と夕方遅くに活動するため、飼料の70%を夕方遅くか、早朝に食べる。飼育に当たっては食事は夏期には1日3回、冬期は2回、春と秋には2~3回与える。飼料の量は個々のシカや季節によって違う。新鮮な水を沢山飲ますためには水槽や水鉢で与える。雌のジャコウジカの飲料水の量は平均1日約 300 ml 位である。大きな囲の中で集合飼育する場合は雄1頭に対し雌3~7頭の割合で住まわせる。

集合飼育する場合は雄同志の闘争を避けねばならないので1グループを10~15頭位にする。若い雄同志が犬歯(牙)で互に闘争するような場合、この雄を小屋に入れて飼養する。飼育中のジャコウジカの個々には指標カードをつけて、これに両親の血縁関係や体重、背丈、体長、麝香の分泌状態、採取量、繁殖などについて記録する。この指標カードの記載内容によって雄雌の交尾をさせて繁殖を成功させる。指標カードには5世代以上の個々の動物の履歴を記録する。

(5) 飼料の栽培

ジャコウジカの食性は季節によって変化する。したがってこれらの食物の幾つかを特定の季節に好物として食べさせるために予め栽培して貯蔵しておく。その栽培場の大きさは飼育するジャコウジカの頭数に応じて考慮する。野菜や多汁質の果物はそこの苗床で育てて、一年中緑の食物を生産するようにし、この地方の野生植物や他の果実をも栽培して飼料として供給する。

(6) 病気と治療について

ジャコウジカは飼育の初期に、伝染性またはその他の非特異性の病気に罹ることが多く、その死亡率は60~70%であった。しかし数世代後にはよりよい治療法と衛生状態の改善によってこの病気による死亡率を減少させることができ、ここ数年来新生児の生存率は90%である。

㉔ パストゥーレラ菌による疾患

この疾患はこの菌によって発病し急性である。1959年当時70頭のジャコウジカがいたが20頭(40%)がおよそ20日間で死亡してしまった。またその半数がこの疾患に罹った。この病気は、新しく捕獲した麝香ジカを長い間、孤独にしなかつたり、捕獲技術や運搬が未熟だとこの菌に侵されておきるようである。

症状：息切れ（1分間120の動悸）、体温39.5℃、歩行困難、耳や聴力が急に低下する。

剖見：鼻に血の塊りがあり、動物性の腐敗臭、内臓の中の血塊、リンパ節の拡大、胸部腔に独特な変化などが見られる。

治療法：多価混合血清（菌の成長阻止と抗出血性血清）を投与する。勿論病気に罹った動物は隔離室に隔離して治療する。

㉕ 慢性化膿性疾患

この疾患は1960年に始めて現われた。そしてその年に拡まった。この疾患の治療はとて難で死亡率も40~50%である。

症状：化膿が頭部から脚部に見られる。食道にも化膿がおきる。感染の焦点は内臓リンパ、肺、および骨にも出現する。

剖見：化膿部の形がソラマメ状で、大きさは鶏卵位である。肝臓、肺臓および他の内臓に特に見られる。この化膿液は淡緑色、黄色または黄緑色である。この菌はブドウ状菌や連鎖状のようにグラム陽性である。

治療：麝香を採取することが主な目的であ

るから対症処置として治療は化膿が皮膚の表面にある場合にだけ行なうが、それも外科的に処置する。この細菌が示す感応試験はゲタマイシン、オウレオマイシンに感じ易く、テトラマイシン、テラマイシンまたはサルファ剤の効果は余りない。

㉖ 肺炎

この肺炎はジャコウジカにとって二番目に危険な疾患である。幼いジャコウジカは特に冬期と春期に肺炎に罹り易い。

症状：息切れ、呼吸数の増大、空咳、疼痛の叫声を発する。この疾患は非常に急性で治療する時間が余りなく間もなく死亡してしまう。

剖見：気管に血液様、あるいは白い泡が見られる。肺は肝臓のような色をしうっ血や神経組織の破壊が見られる。

治療：テラマイシン、テトラマイシン、ペニシリンのような抗菌剤、解熱剤、または鎮痛薬を投与する。この疾患を予防するために、抗菌剤を飼料と一緒に投与する。

㉗ 脱毛

成長中のジャコウジカの1~2%はこの病気に罹り易い。特に冬期に多い。この脱毛疾患はこれらのシカの他の疾患に対する抵抗力を低下させる。この疾患の原因はビタミンや鉱物が不足すると起こるらしいが、この病気は伝染性の疾患である。

症状：脱毛は背中から始まり、身全体に拡がる。皮膚はかさかさになり、疥癬のようになる。脱毛の形は円環状または時々不整形である。患部は褐紫色となる。この疾患で死亡することはないが活力は減少し、痒みは著しく、ジャコウジカ同志互に噛み合うようになる。

治療：普通このシカを隔離し、ペニシリン、ビタミンB₁、肝油、ビタミンD₃などを投与する。

(7) コビトジャコウジカの生態と出産授乳などについて

このシカは季節的な繁殖動物であり、1年半で性的に成熟するけれども通常は2才以後から繁殖し始める。雌の発情期間は10月から2月であるが交尾の殆んどは11月～12月に行なわれる。その発情は24時間続き、雌は1年におよそ5回、毎回18～24日の間発情することができる。その期間中に雌に盛りがきて、身を弓なりにくねらせ屢々放尿し、尻尾をもちあげ低い唸り声を出して粘液を分泌する。膣腔は非常に赤くなり膣の両側の毛は垂れ下って分かれる。このような段階の雌は適当な相手を捜がすために辺りを徘徊する。雄は発情の時は頭を上げ、口から白い泡を出す。交尾時期の間、雄は支配力を誇示するために雄同志互に猛烈に闘う。時々はどちらか死ぬまで闘う。支配力を得た雄は雌の背中の上に5～6回這い上がる。普通1と上ぼり凡そ1分秒続く。雄は雌に精液を射出した後にだけ下りる。中国の飼育場では雌と雄の割合は5：1であるけれども1頭の雄は3～9頭の雌と交尾するようである。普通交尾は夕方遅く、時には朝にだけ行なわれる。繁殖をうまく成功させるために、大ききの等しい睾丸をもった雄が種付け鹿として用いられる。このような雄は良い品質の麝香を分泌する。雌も丈夫で健康状態のよい個体を選ばれるので毎分娩時2頭の子供を産む。妊娠期間は通常6カ月(180日)であるが179日から187日位の差はある。妊娠した雌は隔離した小屋の一つに静かに住ませる。流産を避けるため余り移動させないようにする。

出産が近ずきお腹が大きくなったら運動も避ける。次第に乳房が脹らんでくる。出産の時期は普通5～6月であるが7月になることもある。雌はしょっちゅう放尿し、分娩前2～3時間は自分の腹を見つめ、分娩のために落ち着いた静かな場所を捜がし始める。羊膜液が膣口から流出し、それから20分位後、羊膜が破れる。最初胎児の頭が出てきて、次に前脚、最後に後脚が出て総てが終了する。胎盤は自動的に分離する。分娩時間は通常30分

間持続する。胎盤は胎児と分離後約20分位で出てくるが母親が食べてしまう。新生児と母親は次の室に隔離される。分娩は一般的にはこの1日だけで終了する。飼育人といえどもこの新生児を愛撫してはならない。もし触ったりすると母親は新生児を拒絶したり、死ぬまで打つことさえある。母親に拒絶された新生児は山羊の乳汁で養なうようにする。生れたての新生児の体重は平均約500gであるが1頭であるか2頭(双生児)であるかによってその体重に差があり350gから550gの幅がある。普通出産の75%が双児である。

母親は新生児に1日3回授乳するが、毎回約10分間位与えている。十分に母乳を飲ますと母親は休息のため次の室に行ってしまう。母親と新生児が一緒の室には寝ない。その新生児はおよそ10日間以上そこで寝ているが、その後、母親について歩き始める。授乳は100日から120日間続けられるが、母親の妊娠が再び始まったら中止する。乳児の飲み過ぎを予防するには母乳の分泌を抑制する目的で分娩から産後10日位の間、母親に対する飼料の量を調整する。新生児は誕生後1カ月も経ったら新鮮な草を食べることができるが、この飼料にビタミンA、Dなどを一緒に投与してもよい。

雌の90%は妊娠するが、幼児の死亡率は約30～40%であり、その死亡の殆んどは生後15日以内に起きている。

表 I

歴年	産まれた麝香ジカの数(頭)	1977年までの生存数(頭)		
		合計	雄	雌
1971	28	2	1	1
1972	28	1	—	1
1973	34	5	2	3
1974	28	14	5	9
1975	18	7	0	7
1976	18	13	7	6
1977	19	13	6	7
1978	26	14	7	7
	199頭	69頭	28頭	41頭

表 II

1979年の 誕生月日	1回の出産頭数		新生児の雑雌 別と体重(g)	
	1頭または2頭		♂	♀
1. 5月8日	Single	—	—	557.5 g
2. 5月15日	—	Twin	475 475	—
3. 5月21日	—	T	—	550 502
4. 5月24日	—	T	400	500 500
5. 5月25日	—	T	—	500
6. 5月25日	—	T	425 415	—
7. 5月28日	—	T	550 450	—
8. 5月28日	S	—	—	500
9. 5月31日	S	—	512.5	—
10. 6月1日	—	T	—	500 425
11. 6月8日	—	T	400	350
12. 6月10日	S	—	515	—
13. 6月11日	—	T	—	475 375
14. 6月28日	—	T	400	425
15. 7月1日	—	—	T	500 425

合計 4頭 22頭 ♂11頭 ♀15頭

1979年に生まれた新双生児の平均体重は約456gであり、1頭の場合の体重は平均521.25gであった。

26頭の新生児のうち15頭(67%)が雌で、11頭(33%)が雄であり凡そ1:1の比率である。このことは出産に際し新生児たちの雌、雄のどちらを選ぶか区別する必要がないことを示している。しかし雌の生存率が高いとジャコウジカの生命を長くし、種の生存増加をより高くする。

(8) 麝香の採取法について

中国では檻で飼育して成長させた雄のコビトジャコウジカから繰り返し麝香を採取している。この採取は10~11月に行なう。この方法はジャコウジカを殺すことなく香囊から内部の麝香を採取する新しいもので、中国がその可能なことを最初に示したのである。

この香囊は雄の腹部の臍と性殖器官の間にあり、成熟した香囊の大きさは凡そ長さ6cm、幅3cmで厚さは4~5cmである。

雄のジャコウジカは1年半から麝香を分泌し、2年半頃に盛んになる。したがってそのころから採取する。しかしその分泌のピークは3年から8年の間である。

1975年以前は香囊に簡単な切開をして麝香を採取していたが、その方法は切開を幾度も繰返すことが出来ないし、時間の浪費でもあるので中止し、ここ数年來は簡単な用具を使って採取している。その用具は銀または真鍮製のスプーンで両端に凹があり、一端は他端より少し大きくしてある。

採取は2人で行なうが、1人は自分の膝の上に雄のジャコウジカの腹部を上にしてしっかりと抱えている。他の1人がスプーンを握って、それを香囊の頭部にある孔口から内部に差し込んで粘ばったペースト状の湿り気のある麝香をすくい出す。この時の水分含量は30~40%であるから乾燥のために紙に包んで約1週間自然乾燥する。

採取の時、もしシカが怪我したらその外傷部に何か殺菌防腐剤を塗ってやり、木製の枠の中に戻す。この採取方法はその後の麝香の生産やジャコウジカの飼育について悪影響はない。最も良質な麝香は強い性欲と睾丸の大きさが同じ位の雄から得られる。

この採取を1年おきに行なうと麝香の品質は良好であるが、更に数年おきに採取すると品質は一層よくなる。

ジャコウジカ1頭当たりの採取量は平均6~8gであるが、1978年に2頭のジャコウジカから採取した麝香の量は次のとおりであった。

雄麝香ジカの年令	採取された麝香の量
3才	9.7g
4才	16.2g

◆薬学の歴史(石坂哲夫著) 南山堂発行。

1981年4月20日, A5判, 443頁, 4,500円,
ISBN4-525-70031-9.

薬学という学問の定義付けが難しいことは、時代の移り変りにしたがって、その内容が異なってくるからである。しかも、歴史とはタイムの経過に伴う諸現象に関する変遷と推移、いうなれば既に消滅した過去の事実である点に、史実をめぐる研究面の困難は避けられないことを認めなければならない。

本書「薬学の歴史」の多くの引用文献史料の評価については議論もあると思われるが、全巻を古代・中世・近世・近代・現代の各編に分けて、それぞれの時代区分における医術あるいは医学と密接な関連をもつ薬物ないし薬学の発達過程を概説している。

特に古代エジプト・ギリシャ・アレキサンドリア・ローマなどの未開の医術の中の植物療法は、すでに今日の生薬学、植物化学の発祥を想わせて興味深い。さらに中世におけるビザンチン・アラビア・西ヨーロッパ・サレルノなどの医学と薬学の種々相を伝えている。

また、「近世編」で、封建制度から資本主義への転換期であったルネッサンス期、ブルジョア革命期につづいて近代科学確立期を迎えたのち、18世紀前半を経て産業革命にいたる幅広い医・薬学について、多数の文献史料を駆使して詳述している。

なお、有機化学と実験薬理学の発展に伴う近代薬学の誕生、麻酔と消毒の劃期的技法ならびに細菌学と疾病との因果性から誘導された免疫療法の確立など、薬学が実学であることへの多彩な史実を列挙し、「近代編」を綴っている。「現代編」は、臨床面で今日繁用されつつある抗生物質、向精神薬、制ガン薬などを含めて新薬の発明発見史を書き列ね、それらが如何に多くの労苦と犠牲と試行錯誤

を踏まえて開発されるにいたったかを、感動的なエピソードを織り込んで記している。

(吉井千代田)

◆クスリと社会(薬業社会学序論)(吉岡信著)

薬事日報社発行, A5判, 356頁, 3,000円
ISBN 4-8408-0007-3

全篇を通じて、過去、現在、将来を踏まえた多くの問題提起を行っている点に、著者の意図するところがうかがわれる。すなわち、薬学を専攻し、のち哲学を学び、薬業体験を積み重ねるにつれ、わが国の薬学・薬業の現状を幅広い社会学的視野から解析することに意欲を燃やし、その結果をまとめたものである。

まず、医療の一端をにやう薬剤師の職域は多面的であるにせよ、薬剤師が自らの職業に自信とプライドをもつプロに徹すること、特に店頭という社会に開かれた窓(薬局)を通してクスリを介して、人間味豊かな接客をすることを強調する。

クスリをめぐる神秘性・科学性・社会性のもとより、クスリを扱う薬局・薬剤師の職能、医薬の中のクスリの倫理性についてまでも、著者独自の解釈と論旨を進めている。

巻末に、本書作成に当たって引用、示唆を受けた夥しい参考文献を収録しているが、その多面的な研究調査思考の範囲を知ることによっても、評価されてよい。すなわち、

医療・医薬について問題を提起するもの(38)、医学・薬学を含む科学全般に関するもの(31)、医学を考えるもの(50)、薬学を考えるもの(14)、科学史、科学革命、近代科学、科学思想史、技術史については、西欧・日本合せて(84)、医史・医学史(63)、薬史・薬学史・薬業史関係(86)、法律・経済を含む“薬学と社会”について(17)。の多数に及んでいる。

(吉井千代田)

熊本市で開催された日本薬学会第101年会における薬史学部会は、1981年4月3日、研究報告13題を午前中に終わったにも拘わらず、多彩な史的題目は関心をあつめ、来聴者多数で盛会であった。日本薬史学会の恒例の総会をはさんで、午後は研究発表者間で活発な討論を行うなど、会員相互交流を深めるところがあった。(以下、研究報告順にそれらの内容を要約して記す。演者の敬称略)。

◎「大阪における薬学教育の創まり」中室嘉祐(日本薬史学会)

1875年大阪司薬場のお雇い蘭人 Dwars が、薬舗開業試験のため、薬学講習(薬品製造・鑑定、理化学、植物学、中毒学、生薬学、鉱物学)を意欲的に開いたことに始まる。

◎「九州薬物展覧会について」小山鷹二(岡山県立短大)

「熊薬七十五年史抄」の執筆者の1人として、その補遺として明治30年(1897)熊本で開催された“九州薬物展覧会について”史的考察を行い、薬物展覧会はすでに東京で2回、京都で1回開かれ、いずれも当時薬学・薬業界の最大関心事であった。その第4回が遠隔の地熊本で開かれたことは特筆に値する。その出品内容は生薬標本、和漢薬、鉱物、粉末薬、ガレヌス製剤等で、また来会の長井長義日本薬学会頭らが各地で講演を行うなど薬学についてひろく啓蒙するところがあった。

◎「向井元升とその家族たち」難波恒雄(富山医薬大・和漢薬研)

「庖厨備用倭名本草」(貞享元年—1684年刊)の復刻に与かった機縁で、その撰者向井の家系を探り作譜した。本草学の未熟から隆盛にいたる時代に生きて、元升が医を志した寛永年間鎖国制度が発令され、わずかに長崎が海外文化の導入口であって、本草家としては、元升のほか、貝原益軒、福山徳順らの九州勢があった。

◎「ツェンペリーの来日とその意義」(第4報) ○高橋文(北陸製薬)・川瀬清(東京薬大)

ツェンペリーは3年間の南アフリカ滞在を終わり、ジャワ経由で1775年8月、来日したが、彼の旅行記「ヨーロッパ・アフリカ・アジア紀行」の中で、日本滞在中の1年3ヶ月余の行動と、日本の歴史・風俗・習慣などについて、鋭い観察記録を残している。特にオランダから日本へ輸入されている薬物のうちウニコウルが高価なものとして、商魂を激しくゆるがせた点についても書き記している。

◎「合成医薬品の史的発達」(第1報) ○埴美智子(日立製作所水戸総合病院薬局)・古川隆(医療薬学研)・前田龍子・石坂哲夫(共立薬大)

合成物質の自然発生的な臨床面への利用に次いで薬用植物の有効成分の抽出単離と合成、石炭タール分溜物と有機化学反応の開発、化学構造と生理作用、化学療法剤、向精神薬等のほか、近代医学の発達を背景とする有機合成化学を駆使して、ついに画期的な各種の医薬品の開発について編年段階的に概述した。

◎「近代日中薬学交流略史」川瀬清(東京薬大)

古くから日中両国間の文化交流はあったものの、不幸な情勢が繰り返されたことも史実によって明らかである。しかし、同仁会による組織的な医薬学交流運動の一環として、ささやかながら東京における中国薬学会の成立あるいは魯迅によって日本の薬用植物文献が採り上げられるなど、日中薬学交流のきずなは断たれることなくつながってきた。今や日中国交はなつたが、なお残された未解決の問題を中心に考えてみなければならないであろう。

◎「東ドイツの薬事制度の史的考察」(第4報) 辰野美紀(薬学概論セミナー)

薬事に関する将来構想によって1964年にドイツ医薬品制度研究所(薬事法規、薬局方、医薬品

試験、医薬品の開発・生産・分配等に関する調査・分析・改革のための研究を行う)と同時に、ドイツ薬局制度研究所(薬局制度を社会や保健・医療の目ざす方向にマッチするように再編成するための研究を行う)が設立された。同研究所の調査と実験(1964~1966)の実態調査報告によると、“薬剤師の行動分析によりなるべく雑務を避け、専門知識技能を要する面に努めること、そのため薬局助手、薬局専門従事者らに対する教育と再教育に力を入れ、薬局管理に万全を期すために薬局業務における人的配置に意を用いる”など多くの示唆が与えられた。

●「賢親本草」(その2) ヒキノ・ヒロシ(東北大・薬)

不明であった「賢親本草」の著者を、仙台領の遠田郡涌谷で代々薬種商を業とする長崎屋の家系を追跡調査して、ついに6代目が長崎賢親であることをつきとめた。なお、本書が未定稿に終わっていることは、「本草綱目啓蒙」(小野蘭山)の出版により完稿を思いとどまったものと推定した。

●「貝類生薬の本草学的研究(6)―貝子について(1)」 ○浜田善利・改原由紀子・村上誠愨(熊本大・薬)

「神農本草経」,「唐本草」に記載されている一連のタカラガイ科の貝子に相当する市場品の生薬学的鑑別について、詳細報告。

●「佐渡に自生するホソバオケラ *Atractylodes lancea* DC. について」安江政一(新潟薬大)
漢薬蒼朮の基源植物ホソバオケラが佐渡に自生するのは、伝来栽培されたものと考え、多くの郷土史資料、史書、本草書等について史的考察を行い、享保の頃、重要農産物種苗とともにホソバオケラの種苗が中国より輸入され普及したものと考えた。

●「九州地方産の薬物」佐藤文比古(明治薬大)

肥前風土記、豊後風土記、毛吹草、日本地誌略等に見られる九州地方産の薬物について、産地別に薬用価値ある多種の動物・植物・鉱物の名を列挙して時代考証を行なった。

●「藤原薬子の毒薬(古代毒物考)」宮崎正夫(松山赤十字病院薬剤部)

大同5年(810)、いわゆる“薬子の変”で藤原薬子が服毒して自害したが、その毒薬は「養老律令」中の“賊盗律”と言う鳩毒、治葛、烏頭(附子)のうち、薬子の生涯環境と生い立ちからみて、おそらく附子であろうと推論した。

●「中国古代の硝石について」岡田登(岡崎短大)

消石・芒硝・朴消の三者の化学成分の混同が見られるとして、多くの本草書等の記載内容を精細に検討し、その異同を究めることに努め報告。

(吉井千代田)

— 会 務 報 告 —

◆幹事会 1981年3月17日、17時30分より学士会館にて開く。

◆1980年度(昭和55年度)決算報告

日本薬学会第101年会の際の本学会総会において吉井千代田常任幹事は会計報告を行ない、川瀬清監事により使途に誤りのないことの報告の後、出席会員全員から承認された。

収入ノ部	予 算	決 算	増 減 △
前年繰越	379,104	379,104	0
賛助会費	285,000	210,000	△ 75,000
一般会費	495,000	503,500	8,500
学生会費	15,000	6,000	△ 9,000
投稿料	100,000	161,650	61,650
広告料	40,000	40,000	0
雑誌販売	80,000	53,000	△ 27,000
雑	0	27,030	27,030
利 子	2,000	6,182	4,182
	1,396,104	1,386,466	△ 9,638
支出ノ部	予 算	決 算	増 減 △
印刷費	1,314,790	820,700	△ 494,090
通信費	60,000	50,960	△ 9,040
事務費	11,314	10,040	△ 1,274
雑	10,000	0	△ 10,000
	1,396,104	881,700	△ 514,404

注) 印刷費とは本誌14(2)と15(1)の印刷の費用である。

収 入	1,386,466
支 出	881,700
繰 越 残	504,766

◆1981年度(昭和56年度) 予算

収入ノ部	前年度	予 算	増 減 △
前年繰越	379,104	504,766	125,662
賛助会費	285,000	300,000	15,000
一般会費	495,000	501,000	6,000
学生会費	15,000	9,000	△ 6,000
投稿料	100,000	100,000	0
広告料	40,000	40,000	0
雑誌販売	80,000	60,000	△ 20,000
雑	0	10,000	10,000
利 子	2,000	5,000	3,000
	1,396,104	1,529,766	133,662
支出ノ部	前年度	予 算	増 減 △
印刷費	1,314,790	1,415,000	100,210
通信費	60,000	80,000	20,000
事務費	11,314	14,766	3,452
雑	10,000	20,000	10,000
	1,396,104	1,529,766	133,662

◆会員の移動

	54. 12. 31	資 格 変 更	入 会	退 会	56. 3. 16
		⊕ ⊖			
賛 助 会 員	19	1			20
一 般 会 員	163	3 1	6	3	167
学 生 会 員	10		1	2	6
	192				193

◆会員名簿（第15巻，第2号，p.76～81）の訂正

p. 76, 3行目，浮舟印彦 → 浮舟邦彦

次の3名は物故されたので削除する。

p. 76, 最後の行，石谷熊夫

p. 77, 12行目，大塚敬節

p. 77, 下から13行目，金岡又左衛門。

◆新入会員

浅野正義 113 文京区本郷5-24-4

編集幹事：長沢元夫，川瀬 清

昭和56年（1981）6月25日 印刷 昭和56年6月30日 発行

編集兼発行人：東京都千代田区神田駿河台1-8

滝戸道夫

日本大学理工学部薬学科内

日本薬史学会

印刷所：東京都文京区後楽 2-21-8 サンコー印刷株式会社

滋養強壯生薬製剤

人参四物湯



***** 適応症 *****

次の場合の滋養強壯：
肉体疲労・血色不良
冷え症・胃腸虚弱
食欲不振・病中病後
虚弱体質



Eisai 製薬株式会社

東京都中央区日本橋浜町2-12-4